

FD-59.

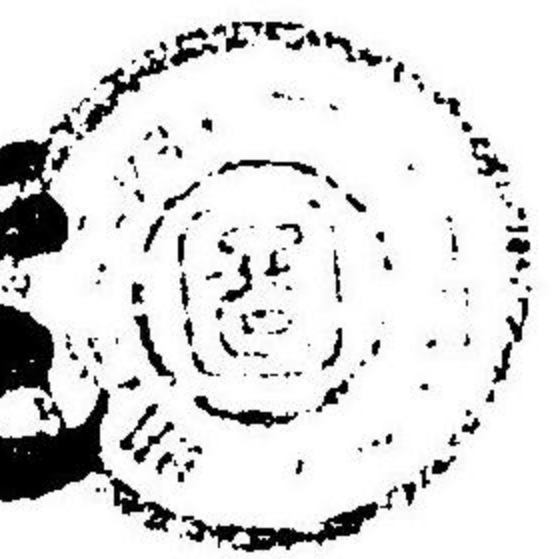
N^o 86/XXIX



四
 其
 秋
 極
 澤
 若
 夢

天
 氣
 秋
 風
 年
 有
 餘

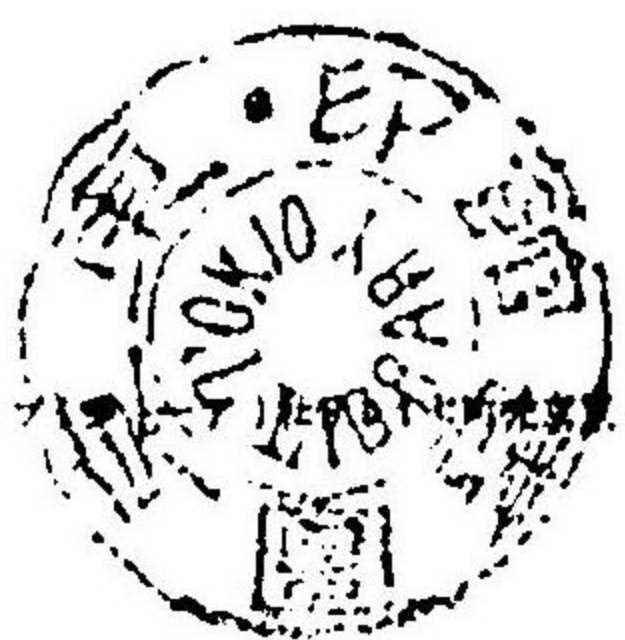
收
 禾
 萬
 里
 臥
 身
 活



忠為志案年第一卷書

庚寅秋日

汪真學居士



緒言

余英國に滞留するの際その風俗生計の摸樣を探らんとし勉めて同家より長居せむ二月にして一遷三月にして二遷。席煖かなるに違あらざりし程にして多種類の家より寓し又多種類の人より逢ひ多少益する所ありたり其見聞感覺を寫して小説にも附かぎ紀行にも附かぬ一種の記録を作らんとし旅窓纔に數篇を草したる間もなく歸朝の途より上り扱て既に歸朝すれば俗務蝟集閑文字を弄ぶに違あらむ是に於て彼の傍聽速記者を招き隨て語り隨て之を速記せしめ漸く其一斑を叙し

了りたる者なれば前後筆記の體裁を變ト趣向も亦自
 から變トて通篇その聯絡を欠き支離滅裂見るも足ら
 ぎと雖ども唯此事實を没却せんを吝み書舗主人の
 請よ任せて之を一書と爲すを許せり讀者幸よ之を
 諒し一篇々々前後無關係の者として通讀せば可なり
 余曾て云ふ文章の筆の毛を以て其の面を撫る程ます
 光澤を増すものなりと然るも本書の大半の彼の
 傍聽速記は成り自から筆の毛を用るされは文字は光
 澤活氣なきの亦是非もなき次第なり讀者幸よ其事を
 見て其文を見されは可なり

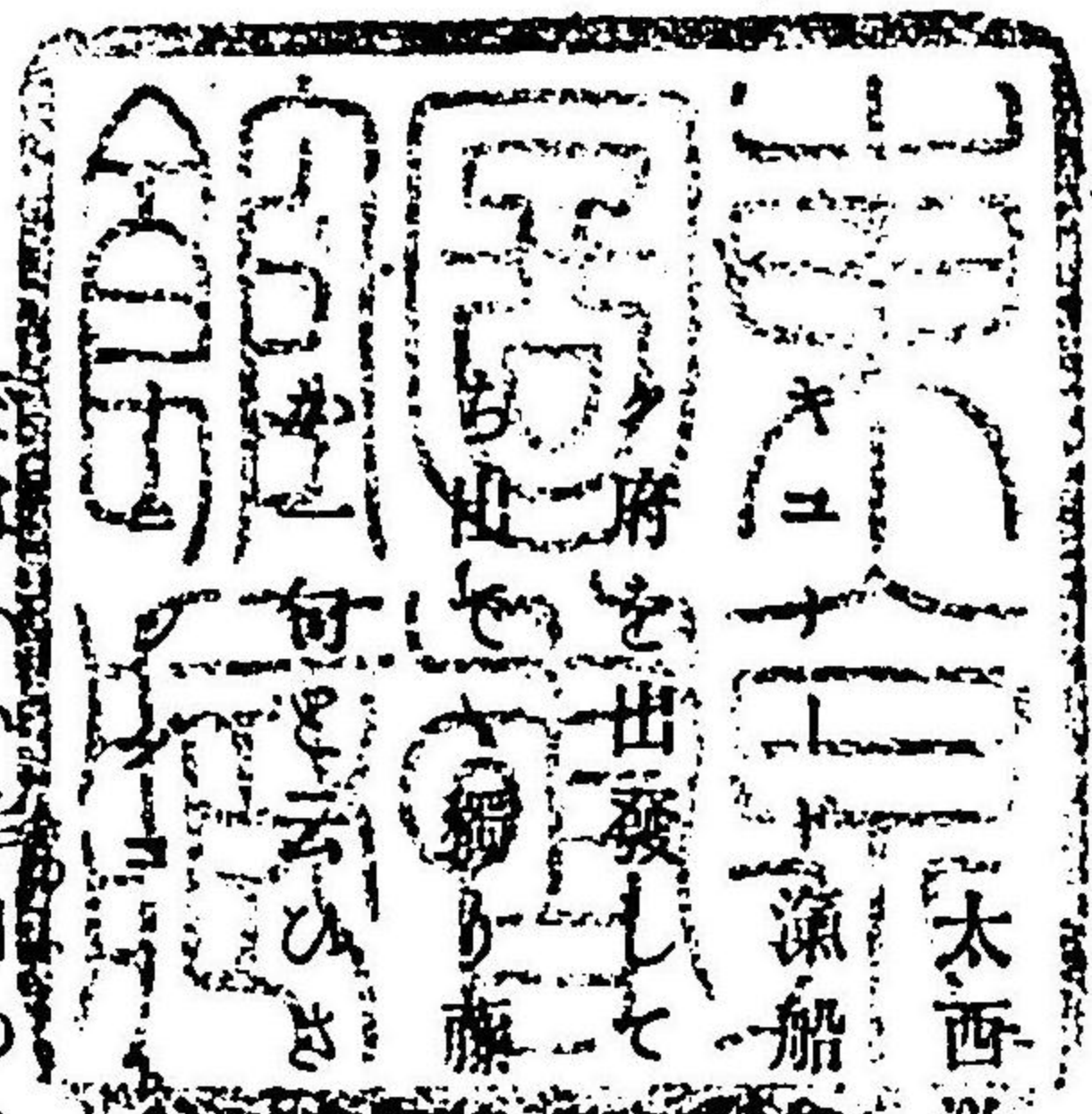
書中金錢の數は涉るもの大抵日本金は換算したれ
 ども場合により英貨の名目を用るたる處あり英貨の
 ポンド。シルリング。ペンスの三位は分れ十二ペンスを
 一シルリングとし二十シルリングを一ポンドとす此
 一ポンドを日本金に換算するは爲替相場の變は因り
 時々多少の昇降あれども大抵金六圓前後なる可し即
 ち今便宜は因り此割合は従ひたれば一シルリングは
 三十錢一ペンスは二錢五厘に相當する者と見て可なり

明治庚寅秋日

著者記

英國風俗鏡

淮亭居士著



大西洋の航海

府を出發してより恰も六日目の朝なりけり淮亭居士は甲板上に立
 獨り藤椅子に倚り掛り晴れ渡りたる大海原を打ち眺めて何
 うも顔附暫らく考へて頭を左右に振りながら黒のモ
 の右手より小さき手帳を取り出し「イヤ詩を作る處
 にはさうい昨日の日記を未だ附けぬエート昨日は三日だらうと」獨り
 首肯して手帳を開らき明治二十一年五月三日と記したるペーザの處
 に

終日曇風波荒くして少しく船暈を覺ゆ前日正午より當日正午まで船の進行四百六十二海里夜に入り食堂にて乗客の素人音樂會あり聴衆より多少の義捐を募りてりヴァプール府海員扶掖會に寄進するの目的ありと云ふ

と記し了りてペンシルの先きを唇に當て外に控いるものはあるまいテ此船は新形だからコンナに速い太平洋ではオシヤニツク號が速いと云つた處が三百二三十しか出はしさい機械世界の進歩は實に恐ろしい者だと獨語し居る處に安倍の貞任も何んのそのと云ふテッぷりと肥れたる大の男が髯を捻りあがらニコ／＼として歩み來り居士とは既に言葉を交へたるものと見は右手の椅子にドツサリと倚りて時に貴下は日本の郵便印紙を御所持さされますか私は年頃印紙集めの癖が御座りましてと居士の顔を横目に掛け龜の子の如く首を伸べ又

縮むること一二回頭より額の邊を三四度撫で廻はして「貴下はアノ日本の貨幣を御所持さるるに相違ない誠に實に御氣の毒ですが御譲り受け申す事は出来ませうか私は貨幣集めの癖が御座りますからへ、へ、へ、と世辭笑ひを爲して又額を撫で廻はすにぞ居士は懷中より一本の手紙を取り出し是れはニユーヨルッ出立の前日日本の友人より届いたもので此印紙は十錢の者です貨幣は一箇も持ち合せが御座りませんか」と印紙の處を切り抜きて渡せば貞任先生是れは／＼と喜びて船首の方に立ち去れり抑も英米並に歐洲大陸諸國にては世界各國の郵便印紙を集むるを樂しむもの多く學校の兒童商店の番頭或は電信其他諸島通ひの婦女子あは美麗ある印紙帳を製して其蒐集の多きを誇り合ふ程あれば中には自から樂しむに非ずして之を賣買するものもあり得がたき印紙は一枚にて三四十錢若くは五十錢の直段を

終日曇風波荒くして少しく船暈を覺ゆ前日正午より當日正午まで船の進行四百六十二海里夜に入り食堂にて乗客の素人音樂會あり聴衆より多少の義捐を募りてりヴァプー爾府海員扶掖會に寄進するの目的ありと云ふ

と記し了りてペンシルの先きを唇に當て外に控いるものはあるまいテ此船は新形だからコンナに速い太平洋ではオシヤニツク號が速いと云つた處が三百二三十しか出はしさい機械世界の進歩は實に恐ろしい者だ」と獨語し居る處に安倍の貞任も何んのそのと云ふテッふりと肥ねたる大の男が髯を捻りながらニコ／＼として歩み來り居士とは既に言葉を交へたるものと見は右手の椅子にドツカリと倚りて時に貴下は日本の郵便印紙を御所持さされますか私は年頃印紙集めの癖が御座りまして」と居士の顔を横目に掛け龜の子の如く首を伸べ又

縮むること一二回頭より額の邊を三四度撫で廻はして「貴下はアノ日本の貨幣を御所持さるるに相違ない誠に實に御氣の毒ですが御譲り受け申す事は出來ませうか私は貨幣集めの癖が御座りますからへ、へ、へ、と世辭笑ひを爲して又額を撫で廻はずにぞ居士は懷中より一本の手紙を取り出し「是れはニューヨーク出立の前日日本の友人より届いたもので此印紙は十錢の者です貨幣は一箇も持ち合せが御座りませんか」と印紙の處を切り抜きて渡せば貞任先生是れは／＼と喜びて船首の方に立ち去れり抑も英米並に歐洲大陸諸國にては世界各國の郵便印紙を集むるを樂しむもの多く學校の兒童商店の番頭或は電信其他諸屆通ひの婦女子などは美麗ある印紙帳を製して其蒐集の多きを誇り合ふ程あれば中には自から樂しむに非ずして之を賣買するものもあり得がたき印紙は一枚にて三四十錢若くは五十錢の直段を

生ずるとあきには非ず小兒の戯の如くあれども婦女子あきには知らず
識らず世界と云へる思想を吹き込み又其國名を諳するの機會を與ふ
る等誠に有益なる手遊びあり併し彼の貞任の輩は結局之を金にして
ビーヤの一瓶もど云ふ算法にして自から之を樂しむに非ず世に容貌
魁梧にしてツブシにしても中々價ある可しと思ふ者が三文の錢に根
性を見せ今少し口數を減して今少し嚴格に控へたらんにはと思ふ處
にて早く既に馬脚を露はし獅子の體に豚の魂を入れたると一般見掛
け倒れのする者少あからず以前の貞任先生も此種類の人にやあらん
ど居士は暫く嗟嘆し居たり扱ても此日は好天氣にして海面波の白き
と見ず特に航海も最早六日日夜に入らば愛蘭のクウエンスタウチン
に着するの日取りあれば無聊に困しむ幾多の乗客次第に甲板上に現
はれ出で或は望遠鏡を以て雲耶山耶と地平線の邊を見渡すもあり或

は夫婦或は朋友手に手を組みて運動を試むるもあり數問向ふに棒を
立て之れに輪綱を投げ掛けて其棒に掛るの多少を争ふもあり或は十
數問を隔て、直徑二三尺の輪を畫き之れに小圓座を投げ込みて其輪
内に入るの度數を争ふもあり思ひくゝの遊興に戀を散ずるは船中の
習ひ斯くて乗客十の九は甲板上に群集するものから後れて出で來り
たる婦人客は腰を据える場所さへあく彼方此方を見廻はしてキヨロ
くマゴくするばかりなり凡そ法律の行はるゝ處には早く腰を掛
けたる者が其椅子の先有權を持つ筈あれども法廷に出でたる代言人
の如き調子を以て渡られぬが今の圓き世の中にして婦人がマゴく
するを見れば紳士は傍より氣と利かせて其先有權を譲るが常あり居
士はマンザラの議論客あらねば今は其椅子の先有權を主張する時に
非ずと覺悟し得意の藤椅子を明け渡して二三度甲板上を來往し夫よ

り食堂上の休息室に入り込みたり此室内には周囲又天鵝絨張りの腰掛を環らし處々に女役者又は各國景色の寫眞帖等を列べ置きて休息客の縦覽に俱し室の中央には丸き大穴ありて之れより食堂の明を取り穴の周圍に欄干を繞らし欄に倚りて食堂を俯瞰せしむるの趣向なり居士は暫く寫眞帖と繰り返へして居たりしが夫れも見飽きたる容子にて後の腰掛に臂餅を搗き暫く瞑目してフト眼を見開らき腰掛の右手に當りて一冊の雜誌を發見したり何人の置き忘れたる者にや面白き問題もがあと身を摺り寄せて取り上げ見れば英國倫敦にて發行するウエストミンスタア、レビユーと云へる文學政治等の評論雜誌あり此雜誌はナインティーンズ、センチュリー(第十九世紀雜誌)フホートナイトレビユー(二週間評論雜誌)等と並び立ちて發行部數極めて多く議論も毎度精密にして誠に有益なる雜誌あれども記事の高尙あると一

冊代價凡そ八十錢内外あるを以て之を讀むものは孰れも中以上教育ある人々にして雜誌に因りて其愛讀者の人品を判斷するを得るなり斷りかしに披き見るも如何にやと躊躇したれども其表題の見出しの内に英國國會議員某氏の物せられたる秋季日本旅行記と題する一篇あるを見て覺えず卷を繰りに最初に日光道中の記事あり郊野一面平坦にして耕作美事に行き届けども農民器械を用ふることを知らず東京を出て、日光に至る途中器械の名を下す可きものは唯簡單なる水車あるのみなぞ記載する所を見れば記者は中々注意家と見ゆたり一ページを讀み了り次ぎの一ページに移らんとする時小さき紙片の挿みあるを發見して「ハ、ア此所有者も此記事を讀み居るか」と一寸した事にも其心を動かすは是れ海外に出でたる日本人の常あり居士は雜誌に心を奪はれ記者が日光の景色を稱して天下第一と爲したる處

に至りボック／＼首肯きん居る其際數尺を隔て、同ト腰掛にドサリと腰を据よわたるものあり何時いつの間まに何人が來りしにやどつと振り返りて横目よこめに見れば年頃六十ばかりの老人前額極めて大に髪は灰色にして顔に髯ひげなく一方の耳より顚かぶに掛けて他の耳に達するまで薄き白鬚を環たまらしたるは楕圓形の池の縁ほとりに枯れ蘆あしの生なひ茂しげると申す様ようも鹽梅あんばい眼は鋭くしてピカリと人を射るやうなれども競賣きやうばい人の眼の光りて狡猾くわくわくらしく見ゆるとは違ちがひて何となく上品じやうひんある威嚴ゐげんを添そへ白しろフヲナルのチヨッキに霜しもふり羅紗らさのビシチヌ、コートを着し黒の襟飾えりかざりりを飾りなく結むすひて白革の半靴はんくつを穿はち誠に質樸しつぱくなる出立いでたちなり居士こゝしは此人こそ必ずウエストミンスタアレビユーの持主もぢぬなれど心附こゝろづきて丁寧ていねいに「是れは貴下きげの物にて候まうらか日本旅行の記事きじに浮うかされて思はず之を披ひき見たり無禮むらいはお教おしるし下され」と雑誌を閉とぢて差戻せば老人は悠々ゆうゆうと見

返かへりて皺しわ枯かれたる聲こゑを出だし「イヤゆつくりと御覽ごらんなされ扱貴國が近來驚おどろ可おき進歩しんぱを爲なしたと云ふことは毎度新聞雜誌で承知致ましますが記者が無學むがくなるか左ひだりなくば經驗けんげんの足らぬので其進歩を引ひき起おこしたる心理こころ的てきの現象げんじやうを説明せつめいするものがあいのほは惜なしい事トや驚おどろ可おきと云ふ形容詞けいようしはコンナ處ところに用もちふる字ではない進歩を爲なすには年來國民の間まに養やしなはれたる下地したちがある筈はずで夫れを究きめて見れば何にも驚おどろ事はない筈はずだ併ひし此進歩を促うながしたものは西洋の文明ぶんめいだらう其文明ぶんめいと導みちびいたものは誰たれだらう日本人自身にほんじんだらうと是れまでは獨語どこごの如ごとき句調くこうありしが此に至り雑誌を手に取り之を卷まき自分の膝ひざの頭あたまを軽くタ、キて「時に貴下きげは何御用なにごようにて英國へ御渡航ごたうかうされますか」と問掛とひかけたり居士こゝしは初めより此老人の俗物ぞくぶつならざるを察さしイデ談敵だんてきに爲なさんずものと膝摺ひざすり寄よせて言葉ことばを改かめ

「左ればです英國商業社會の仕組を知りたいのが私の願です御承知の通り日本にては古來國民に西洋文明を導く丈けの下地はあつたのですが三十年前開國の初には丸で西洋の事を知らぬので爾後洋行するものは西洋とは何ぞや」と云ふ疑問を解く爲めで西洋の街道は斯くくにして其家屋は箇様く何の國は何の國に隣して其大小如何ぞと云ふとを見聞し歸りて之を人に語れば夫れにて先づ西洋諸國と云ふ思想を廣げるの用を爲したので是れが日本人洋行の第一期です併し此期限は過ぎ去りて西洋人は何事を爲し居るや」と云ふ此疑問を解くのが今の第二期洋行者の義務に爲つたのです

老人「成る程ソコで今でも洋行者が澤山御座いますか
居士「随分澤山です夫れも第二期洋行に適した人物なら宜しいが丸で洋語も何んにも知らぬ洋行者が金棄てに參るには困ります彼

等は山伏が本山參りをするのと同トで西洋に來て法螺の種を仕入れて夫れで高聲に吹き立て、御祈禱をキカせる積りでせうハ

老人「何處でも人情は同トとで近頃我英國でも國會議員に撰ばれやうと云ふ者などが印度、加奈陀、濠洲等へ旅行する流行があつて歸りて旅中の奇談を語れば人民は面白半分に聽聞する、法螺の聲の高きものは矢張俗耳に入り易く夫れにて撰擧人の人望を取る者が幾人もあるさうですアハ、ハ、ハ、ハ、

居士「何に私費で旅行ならお好き次第ですが……シテ又貴下の御旅行は

老人「保養かたゞ米國へ參り夫れより墨西哥に遊んで又ニューヨークに立ち戻り二箇月目で今やうやく歸る處です私は年來著述

に耽りて旅行する事もなければ俗社會と交はる事もなく云はれ
 方外人ですが米國の學友等が度々來遊を勸めて參るし夫れに近
 來は病氣勝ちだから英國の所謂三月風に四月雨と云ふ氣候を避
 けて遙々彼の地へ出掛けるどヤレ宴會ソレ演説と却つて健康を
 害するやうの次第ハ、ハ、ハ、ハ、浮世は中々うるさい物でナ……
 と言ひ掛けて兩手をツボンの隠しに突き込み目を瞑りて暫時無言
 の姿あり淮亭居士は三四週前ニユーヨルツヘラルド新聞に英國にて
 雷名轟く某學者がホストンにて演説したる其筆記を載するを見たれ
 ば「ヤレ宴會ソレ演説」と云ふ言葉を聞くと同時に若しや此老人が彼の
 碩學には非ずやと訝かりながら目を放たずシロリと睨み居りし
 が此處で此翁の正體を見究むる機會ならんと力を込めて

「サテ御漫遊中には定めて面白き御感觸も御座りましたらう何なり

承りたいものですナ

此時老人は目を見開らきキラリと光らせて居士の顔を睨らみ慥の鬚
 を二三度引張りて

「ハ、ア何に格別の感觸も御座りませんで凡そ物を視察するには近
 く寄らんよりも却て遠方に居る方が宜いもので例へば山の全勢を
 見るには山に入るよりも野に立つ方が宜いのと同トとで其國の新
 聞雜誌を讀みては人情事業の趣を察し土人并に他國人の旅行記等
 を閱しては其切れくの事實と總合し斯くて深切に觀察を下せば
 一室に座して世界文野各國の完全なる状態畫を見るとを得るもの
 です平常外國の事に注意せぬものが外國に渡りたりとて何にも分
 るものではない例へば山に入るものが周圍の立木に蔽はれて全體
 を知るとの出來ぬのと同ト事トや私が今度漫遊した米國と云ひ墨

西哥と云ひ四十年前より私の腦中輿地圖に載つて居たのです米國は錢の國です錢の爲めに奔走する度が過ぎて人の健康に差し響き米國人の頭髮は英國人よりも十年早く白くなり腦病人の數が増加する傾むきがある昔し學友ジョンヌアト、ミル氏が人生の目的は學問にあると云つた時私は之と駁撃したが今の米國人は人生の目的は錢を得るに在りと口でこそ言はざれ實地に證據立て、居る憐れなる人間は方便に目的と能く間違ひます又黒西哥では國に最も必要ある中等社會が少いと云つて宜しからう上等の者は金と土地を持つて居るが愛國心があつて氣候が宜い外國に住んで居て唯年貢だけ取り國に残るは貧乏人ばかり是れも社會學の方より云へば……………

と云ひ掛けて暫く無言ツツと右手にあるピアノと睨らみて俳諧師が
 名句を考へ出す時の如き容體憐はれやピアノはメスメライスされて
 獨りで鳴り出しはせぬかと思ふばかり斯くて數分間を経て言葉を續
 ぎ

「また氣分が悪くあつたから部屋へ歸らうと思ひます併し貴下は英國へお出でだから唯一言御注意申すが凡そ他國の事情を知らんとする者は其國上中下三等の家族の有様を知るとが肝心です商業を御取り調べあさるにも矢張り是れが大切です勿論商業は戸外の仕事だが戸外の氣風は戸内より吹き出すもので戸内の氣風の高尚ある國では商業の信用が必ず厚い併し其戸内の家風を探究するのは實に六箇しいもので餘程注意せぬと偏見が出ます宗教熱心家などは類を以て集まりて派出なる社會の有様を知らず野卑なる人家に住居するものは凜然たる元氣の何處に存するやを知らず家風の探

究は實に六箇しいものです國の家に於けるは森の木に於けるやうなもので森の性質を究むるには滿山の樹木を見通して蟲喰ひが多いか素性が善いか廣く當つて見るが肝心です國の性質を調べやうと思へば矢張り………

と急行列車の勢で辨じ來る處にシャン／＼と打ち出したるは午飯の鐘ありナルと甲板上の乗客は其儘食堂に先登するものあり部屋に歸りて手を洗ひ徐々に後詰めを爲すもあり食堂は此室の足底あれば腹のへった西洋人が皿を打ち鳴らす聲を耳を亂してガヤ／＼たり老人は一吋懷中時計を見てット席を立ちたれども居士は餘論の聞きたさにしばらくは腰を得わけず左れど老人の正に立ち去らんとする容子を見て名残り惜しさうに握手してお互にグッドデイサア

倫敦府

倫敦は天下の大都あり東西十四英里、南北八英里、地積百二十二英方里戸數は七十五萬軒、人口は四百七十萬、程かく五百萬に上るあるべし府はテームス河を抱て四方平坦に打ち開き往昔羅馬軍渡來の前より既にブリトン人の部落あり次第／＼に繁昌して今の大都會を成したることあれば一萬四千五百の町數横斜屈曲に入り亂れて街の幅員も割合に狭く府の中央東部なる商業中心場の周邊は往來の群集甚しく肩摩殺撃など申す言葉にて形容す可きに非ず此群集の中に入りて其人壁を穿ち去るはパナマ運河を掘り抜くの難きにも喩ふべく地下の鐵道は人家の底をノタツリ廻はり地上の鐵道は其上を走り屋上の鐵道は又その上を駆け廻はる左れば府内の混雜なる處には一英里四方に三百餘英里の線路ありて地上に地下に其往來人と運送し千五百輛の乗合馬車は一年中に合計千六百萬里を走りて凡そ五千萬の人數を乗

セキヤブと稱する二輪の馬車は其數一萬二千輛にして馬丁四萬五千人馬三萬頭を使用すと云へり大仕掛ある哉倫敦府、淮亭居士は入府以來既に兩三日を経るまゝに自から地圖を案トて日本の公使館領事館等を訪ひたれども折々方角を間違ひて不經濟と知りつゝも例のキヤブの御厄介と爲ること多く碁盤の目なりのニューヨーク市街を往來するやうある工合に參らぬが不規則ある倫敦府の常にして未だ大體の見物をも爲さざる處に日本おトみの英國商人ストロースと云へる男が當時倫敦滯在中にて東道主人たる可しとの事、夫れは何よりの仕合なりとて兼ねて約したる時刻より同氏の事務所に赴きたり抑も此ストロースと云へる男は英國富豪家の子なれども年少遊蕩の癖ありてシミ、商業に身を入れざるにぞ父なるストロース氏は心を惱めて其子を友人某氏に托し身持の全く治まるまでは重ねて汝を視ざる

べしとて家に入出入するを許さず然るに右の某氏は手廣く日本との貿易を營み神戸大坂に支店を置きて茶烟草等の輸出業を爲し居ければ今より凡そ十年前に勘當息子のストロースを大坂支店勤めと爲し其仕入方を任せ置けり然るに遊蕩と稱する病氣は轉地療養にて治す可きものに非ずと見ゆストロースは日本在勤十年の間に大坂藝妓を身受けするやと毎度奇談を編み出して妙に通人を氣取る最中即ち一昨年の秋の頃英國よりして實父死去の報知に接せり斯かる悲しき場合にも錢の勘定を忘れざるは是れぞ英國人の持前にして亡父の遺言書開きに立ち合ひ遺産の福分けにあり附かんと烟草賣捌きの用事を兼ね悲喜相半ばして古郷に歸れば豈に圖らんや遺言書中には別に遺産の條を載せず實子ストロースの後事をば總て母の意に任すとあるのみ是に於てかストロースは其失望大方あらず唯此上は母氏に事へて程

よく其機嫌を取り斯くて遺産を得るより外あく折も折どて烟草の荷物も其賣口の狭くして一時に片附く可きに非ず扱こそ一昨年秋の頃より今まで倫敦に滞在するかれ居士はフトした因縁にて右のストロースを神戸に知り其人と爲りも承知なれども彼れは生れが上等にして且つ相應の教育もあり自稱通人と云へる氣性の者ゆる倫敦の案内者には偏強あらんと扱て其事務所を尋ねればストロースは果して待ち受け居れり此男は日本語の名人にして如何ある言葉も知らずと云ふ事なく先づ居士を上座に延きて机の引出しよりソツとブランドの瓶を取り出し隣室の小僧等の目に觸れぬやうグツと傾けて

「英國でもコンナ秘密が御坐いますテ貴下は下戸だから上げますませ
 居士イヤモウ決して時に大さう手廣い事務所ですナ

ストロースは「茲はフエンチャイナと云ふ處で是れから日本領事館のあるビショップスゲート夫れからロムバート街あたりは倫敦の中央東部と申して商賣の中心です大坂や神戸では商賣取引の中心に商賣人の家族が住んで居て銀行の合壁から飯を焚く烟が騒がりますが此邊ではコンナ大きな家を幾個にも仕切つて一棟の内には五軒も六軒も事務局ばかりを置くのです此近處に鍋釜を置いて飯を焚くものは御坐いません夫れだから事務局が一ツ所に集つて電話機を掛けたり金銭を持ち運んだりするのに大さう都合が好いのです

居士さやう商賣の中心は事務局ばかりにして家内眷族を住ませぬやうにしなければならぬ日本でも市區改正をする者は此考を持たなければありますまい處で此事務所は二室で家賃は何程か

ストロース一年三百磅ですから一箇月が二十五磅で日本の金にすればザッと百七十圓ばかりです。茲は二階だから高いのです。四階か五階からさう高くはありません。二階が四階より高いとは妙でせうハ、ハ、ハ、ハ、

居士「夫れから御案内を願ひませう」
と云へばストロースは打首肯して又ブレンダーを一杯飲みブラッシュを取り出して外套の塵を拂ひ筒袖の先きにて絹帽子を二三度撫で居士が低き帽子を被るを見ておあなたは高いのをか買ひかさいシエンツルマンの位が下がりますヨ左様から参りませうと先きに立ちて街道に出で人込の中を潜り抜けて行くと五六町にして遙か向ふに一大橋あるは是れ名にし逢ふ倫敦橋なり橋の手前より左に折れて十間ばかり引込みたる處に大なる圓石塔の立ちたるは即ち大火記念碑あり

居士は嘗て英國史を讀んで千六百六十六年九月倫敦に大火あり三日三夜火滅せず寺院八十九人家一萬三千と延焼して光燭四十英里外に達せり云々の條をカスカに記憶したりしが今此大火記念碑の前に來りて忽ち歴史上の事實に思ひ當り彼の大火は倫敦橋近傍の麵包屋から起つたので記念碑を麵包屋の跡に建たと云ふが成る程ハ、ア高いものだオイこりやストロース君何フヒートだと何に二百二フヒートあるとイ成る程ハ、アと居士は頻りに感心しストロースの後に隨ひて塔の入口の處に廻はり銘々三錢ツ、と拂ひて夫より塔内に進み入ればクルクルと螺旋形を成したる段階子を登るの趣向にてエンヤラヤツと頂上に達したる處に四方一間通り鐵欄を張り出し是より一目に倫敦を見下さしむるとありストロースは脊が高く顔立ちも立派にして鼻下に嚴かめし髭さへあり見掛は申分なき男おれども物を言

ひ出す時、おりくドモリテ暫時沫を吹くとあり右の鐵欄に上るや否、
 巍然として西の方に兀立したる圓き大伽藍を指さして「ア、ハ、ハ、ハ、
 ハ、
 を此伽藍に注ぎて夫より南の方を見下ろし豆人寸車が蟻のドン／＼
 参りをする倫敦橋の此方より小蒸汽船が立田の紅葉を散らすチーム
 スの廣き流れに沿ふて次第に見上ぐる遙か向ふに尖塔の一層高く聳
 ゆるあり彼れは何塔なりやとストロースに問へば答へて國會議院を
 りと云ふ夫れより東南の方に廻はりて古城めきたる者の目先きにあ
 るは何物ならんと思ふ處に年頃二十四五とも覺しき純粹山出しの一
 婦人がストロースの手を引張りて「彼れは倫敦塔で御坐りやんすべ
 が「ナアモシ」と問ひ掛くるを聞きて居士は「成る程彼れが昔し王后アン
 を始めとして多くの人を刑に處し殘酷な事をした處だナ」と獨り首肯

きて其下手に引き續く無數の船渠を眺め居たり抑も倫敦と云へ
 る都府は無類煙深き場所にして今日此頃の快晴にも少しく程遠き所
 を望めば紗窓を隔て春の山を覗くと一般唯ボンヤリとして見え分か
 ず此ボンヤリの景色の内にも夏の朝の符の如くニヨッキリとして
 突立ちたる數限りもなきお寺の塔は流石頭だけ眼前に現はれ杜子美
 の所謂南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中と云へる句も思へば境に觸れ
 て出來たるものある可しなと種々の想像を畫き居る處にストロース
 は後より居士の肩をポンと敲きてセントポールの塔を目當に是より
 見物する道順を示し「イヤ左らばとて共々塔を下りたり
 斯くてストロースは喉濕しにとて角の酒屋でヒージャー一杯夫より倫敦
 橋の袖に至りてチャーリングクロス行きの乗合馬車を取り細き階
 子を傳はりて其二階の腰掛に倚れば行く／＼街の見物に妙なり扱此

馬車は最も繁華ある處を通行する者にて先づ英蘭銀行の角に至り夫よりセントポール寺院の傍をクルリと廻はりてストランド街に出たり此近傍一帶は各新聞社の巢窟にて是より裁判所と例のテンプルと云へる代言人製造所を通り過ぐれば即ちフリート街とある是れは芝居座の巢窟なり斯くて程なくトラファルガル四辻に若すればチルソンの像は巍然として雲に聳ゆる記念碑の上に立てり扱此四辻にて馬車を下りストロースは又喉濕しのおまどなひを爲して夫より左手に歩み行けば右手に洪大なる官省ありて樞密院、文部省、内務大藏等の諸政局皆ち此館中に集まれり又其次きに同様の大建築あるは即ち諸官吏の官宅にして之れに對する左の側には昔しより有名あるホワイト館並に秘密探偵局なるスコットランドヤード等あり左見右視ながら眞直に行きて國會議院の前に出たり議院の手前より虹の如くテーム

ス河に懸りたるは即ちウエストミンスター橋にして世界第一幅の廣き橋あり橋上より議院を望めば亭々たる龍閣、漫々たる江水に枕して遙にセントトーマス病院と相對する其雄壯比ぶるに物あし夫より更に引返してウエストミンスター、アペーの側を通りセントゼームス公園より新ボンド街に出でたる頃は午後二時を少し過ぎたりストロースは又喉が乾きたる様子にて談がドモリ始めたれば其々茶店にて午飯を喫し夫よりピカデリーと云ふ大通りに出で西に向て二十分ばかり歩みてハイド公園の入口に着せり門を潜りて園内に入れば右手の鐵柵の近所より柵に沿ふてチューリップを始め種々の草花を美事に栽に附け花の五月の時候なれば今を盛りと咲き出でたる其うつくしさ言はん方なく特に此チューリップは青き莖に猩々緋の瓣が通例にて花の形は杯の如くストロースの如き酒客にはシラレット入りのコ

ツブかど見られて又どろ喉が乾く可し扱て此花畑より左に向ひ
 青々たる芝生の廣々と開きたる其中には馬車道、人道、馬乗り場、就れも
 鐵柵にて區畫を立て凡そ倫敦季節の間は贅澤ある家族の夫婦子女或
 は朋友打ち連れて立派に出で立ちたる馬車に乗り花を見るにや見ら
 るゝにや午後二時頃より五時頃まで此園中を住復するにぞ馬車道兩
 側の見物人は長き置き椅子に腰打ち掛けて其行列を見物する遙か向
 ふの芝生には近衛兵にやあらんすらん赤き軍服にて訓練する又其近
 傍の馬場にては遺却珊瑚鞭、白馬驕不行きと云ひる金衣の公子が男裝
 高帽子の貴婦人と鑣を駢べて駢け廻はる春の景色は様々あり居士は
 ストロースと連れ立ちて路傍の椅子に腰を掛け馬車の飾りの巧拙な
 ど評し居る其時ストロースは物知りらしく

「淮亭君アレ御覽せよ此處らに駢け廻はる馬の尾は三寸ばかり本を

殘してブツツリと切つて御座いませう元この馬の尾を切つたのは
 貴族達が兎獵りをする時乗つて居る馬の尾がヒョットとして生垣に
 引掛るので夫れで切つたものですが今では尾を切るのが高家の馬
 の商標のやうに爲つたのです尤も尾を切る代りには蛇や蠅の防禦
 法は立てゝやるでせうけれども兎に角迷惑なのは馬ですよ

居士大さう馬の味方とするが馬から賄賂でも取つたのトやアないか
 成る程さう云へばニューヨークの第五廣路あたりでも時々尾を切
 つた馬を見掛けたがドンナ共和國の人でも金が出来ると妙に貴族
 風が出るものと見える

と語り合ふ折柄ストロースはヤツと叫んで二三歩前の方に駢け出し
 今しも西の方に向て走せ去りたる馬車の後影を見送りながら腰掛に
 覆して

「アレは私の母です向ふ側に乗つて居たのが二番目の妹です別品でせうアレは近々嫁入りをするので其前に油畫を畫かせました今開いて居るロヤル、アカデミーの繪畫共進會に出で居ります千磅取られたさうです今度は能く氣を附けて御覽なさい引返して参りますから」

言未だ畢らざるに右の馬車は果して徐々と引返し來れりストロースは帽子を取りて二三度振り一二間進み出で挨拶すれば母と妹は箱馬車より此方を見返へりて笑ひながら唯ニコニコとして過ぎ去りたり

居士成る程別品だ夫れにお母さんも大さう若いトやあいか

ストロース最早六十三ですが中々死にさうは御坐いません

居士英國の母親は氣丈と云はふか冷淡と云はふか君が餘り金もなくツてコレは失敬公園の腰掛位に休んで居る其前を黒塗り二頭

立の馬車で平氣な顔でお通りなどは日本のお母さんでは出来ぬ事だ

ストロース私が酒を飲むのでお母さんは金を呉れませんア、又喉が乾いて來た外へ出て一杯遣りませう

居士一杯一杯又一杯には困るナア私は前から話した通り今から友人の宅で日本飯の約束があるから失敬だが此處でお別れにしませう

ストロースドウテす倫敦は

居士馬鹿に大きくツテ一句も出さぬ倫敦やア、倫敦や倫敦や位の者だアハ、、、

ストロースま、、、ま、、、ま、、、まつの島やの作り換へてすかアハ、、、

下宿屋

女ッシテ彼ノ丹治さんは誠に優しくッテ私をお母さんあんぞッて呼ぶのですよ段々伺へばお父さんは子爵だッてッシテ地面が澤山あッて四疋立の馬車があるさうですシビルも大そう氣に入ッて散歩は何時でも一處でした

男ハ、ア其處でッノ丹治氏は何處の學校に行きましたエ

女思ふやうな學校がないッて宿に四箇月ばかり御逗留ささいました
 がブライトンの近處で此間内教師をお見附けさッて五六日前にお移りにあり其教師に一箇月下宿料とも十五磅お拂ひなさるさうですが私とシビルに是非一日出掛けて來いと昨日電報をお掛けささいましたから次ぎの金曜日にお見舞に參る積りでシビルはもう新らしい帽子を買ひましたよ

男丸で知らぬ人ならば私は黙ッて見て居ますがお互の中だから御注意まで申しませう日本の事を知らぬ外國人は子爵だとか何んとか云ふ名前を聞いて直ぐに自國の比較を取り大さうさ者だと思ひ違ふ事があります英國で子爵と云へば成る程大さうさ者だらうが日本では中々その比較には參りません一體日本と英國とは生計の度が違つて居て早く云へば衣食住の費用も英國の一週間が日本の一ヶ月に當ります此處では一寸した下宿でも一週間二磅が通例だが二磅と云へばザッと日本の十三圓日本の下宿屋では上等でも月に十三圓は取りませぬ他家賃から地代から萬端の費用が日本は英國の四分の一と云はふが寧ろ五分の一と云つて宜しからう今愛國心抜きて申せば日本では子爵どころか伯爵でも此位の家に住つて居るものは先づ少ない方ですから名前を聞いて夫れで英國の比較を

取ると飛んだ間違ひが起りますッシて日本人の嫁に爲る人は、
 、、と言ひ掛けたる時此家の娘シビル嬢は手養の猫をトやらしあ
 がらお母さん是れ御覽アスがこんなにはトやらけるからホ、、、
 、と駈け来りてッ立留り間が悪るさうに今しも實が入りたる談話
 を一心に聞き居たる女の側に坐を占めたり
 女ッレから何です嫁にする人は

男本國に居るやうな愉快はありますまい第一衣食住の習慣が違ふ夫
 れに言葉が分らなければ社會へ出てモ面白くさい此等の相違や不
 便なを能く知り扱て居て夫れで離婚から結構です

女ノウ／＼／＼／＼オノウ英吉利人は身持ちが悪くッて眞に亭主に
 は出来ませぬ佛蘭西人は猶更の事獨逸人はモウ／＼／＼實に身の
 毛がよ立つやうで宿のケンボルグ(此家に下宿する獨逸人)を御覽な

さい亂暴で仕方がありません此間マギー(此家の下女)を捕まへて無
 理にキッスをしましたから私は頬べたを痛くツチつて遣りました
 人は顔形には依らさいもで心様が優しければ黒坊でも構ひません
 私は日本人に限ると思ひます

男夫れでもあなた御亭主は英吉利人ではありませんか

女アレは又別物ですアレの若い時は眞實に美男で目がアの通りハッ
 キリして其頃は髪がピカ／＼光ッて眞實に立派でしたッレに
 アレの両親が私と婚縁する事を許さなかつたので大さう心配しま
 したよシビルもお爺に似て居りますが是れの姉はもつと善く肖て
 居ります

男オヤ／＼シビルさんの姉さんがあるのですか

女ハイ亭主自慢に今まで晴れ渡りたる顔の天氣は忽ちムラ／＼と曇

り立ちて眼元に涙の雨を含み併し不幸娘でして二年ばかり前に宿に居た下宿人と逃げ出して今ではフヒンスベリー公園の近所に住んで居りますが惜しい娘ですから返して呉れると何遍も掛合つて見ましたが先きの男の両親がドゥンでも返しません男は活智のない奴で何處かの店に働いて一週間一磅位しか賃は無いのですから娘は難儀をするでせうお爺は大さう怒りまして堅く出入を許しませんが私は時々公園に出掛けて顔を見て参ります誠にはやア、、、暫く首を低て無言ありしがトトリ返りてニコと笑ひ私はシビルと一處に來年日本へ参ります此間丹治さんのお父さんと御同役の者が(シビル嬢を見返へりて)何とか云つたチアノ方の名

は
シビル野呂間さんかエアノをれの家は西洋館だから日本へ來たらお

宿をしやうとかしやつた方だらう

女ソレ〜其ミストル野呂間も知つて居るし日本の人は澤山に知つて居るから來年はねーシビルソシて子お母さんは次きの週間に公債の利子を四十磅受け取る筈だから來年までには是非男の方に向て(おあなたも來年お歸りあらお宅をお尋ね申しますよ

男眞平御免を願ひませう僕の家あんずは頭が支へてあなたを半分に切らなければ這入りません外國へ出てマサカ尋ねて來はしまいと出放題の大言を吐て他日其西洋人に尋ねられて大に赤面する者があるから私は丸でお世辭なしです夫れと御承知あらお出でなさいと問答する男女二人は言はずと知れた淮亭居士と其下宿屋の主婦ありけり

是より先き淮亭居士は太西洋の瀛船中にて圖らず年老ひたる異人に

り立ちて眼元に涙の雨を含み併し不幸娘でして二年ばかり前に宿に居た下宿人と逃げ出して今ではフヒンスベリー公園の近所に住んで居りますが惜しい娘ですから返して呉れると何遍も掛合つて見ましたが先きの男の両親がドゥッシても返しません男は活智のない奴で何處かの店に働いて一週間一磅位しか賃は赤いのですから娘は難儀をするでせうお爺は大さう怒りまして堅く出入を許しませんが私は時々公園に出掛けて顔を見て参ります誠にはやア、、、暫く首を低て無言ありしがツトろり返りてコッコと笑ひ私はシビルと一處に來年日本へ参ります此間丹治さんのお父さんと御同役の者が(シビル嬢を見返へりて)何とか云つたチアノ方の名は

シビル野呂間さんかエアノをれの家は西洋館だから日本へ來たらお

宿をしやうとおしやつた方だらう

女ソレ〜其ミストル野呂間も知つて居るし日本の人は澤山に知つて居るから來年はねーシビルソシてチお母さんは次きの週間に公債の利子を四十磅受け取る筈だから來年までには是非男の方に向て(あまたも來年お歸りあらお宅をお尋ね申しますよ

男眞平御免を願ひませう僕の家あんずは頭が支へてあまたを半分に切らなければ這入りません外國へ出てマサカ尋ねて來はしまいと出放題の大言を吐て他日其西洋人に尋ねられて大に赤面する者があるから私は丸でお世辭なしです夫れと御承知あらお出でなさいと問答する男女二人は言はずと知れた淮亭居士と其下宿屋の主婦ありけり

是より先き淮亭居士は太西洋の瀛船中にて圖らず年老ひたる異人に

逢ひ重ねて其説を叩かん者と始終待ち構へ居たれども異人は寢室を
 出で來らず然るに船は其夜の内にクウキンス、タウチンの沖に着き翌
 日午後三時頃リヴァプールに入港したりければ荷物を片附ける、上陸
 を急ぐ、上を下への混雑に異人の事も打ち忘れ其姓名さへ問はざりし
 がリヴァプールに一泊して翌六日に倫敦に入り友人の訪問、市街の見
 物、或は諸商館に至りて調査の手順を立つる等多事に紛れて夢の如く
 既に二週間餘を過ぎ去りたり折しも今日は朝方より打ち濡りたる天
 氣にて窓に傳はる鳥の聲は綠ますく色添ふれど木の間にさまざまひ
 飛ぶ烟は目を遮りて鬱陶しく日本にては目に青葉山ほどゝぎす初鰹
 魚の時節あらん護國寺の躑躅堀切の菖蒲、花の消息如何あらんなど物
 に觸れて想像を畫き又往事を追想するは是れぞ旅人の習にして何時
 しか彼の老人が家風探究の要を説きたる事をも思ひ出し折もあ

らば英國の家内の有様を探りて見んど己が下宿を手始めとして此日
 の夕刻、客室にて主婦を相手に四方山の話に時を移す中、談話の筋道が
 横手に曲りて遂に此家に下宿したる日本人丹治氏の贈に及べるあり
 抑も此下宿は倫敦の北部詩人街と云へる通りに在りて家號をパイロ
 ン、ハウスと云ふ街名家名は風雅おれども俗氣は至て紛々たり扱日本
 の家にては何亭何房おど楣間の扁額に掲ぐるが通例なれども英國に
 ては何 House、何 Villa、何 Cottage 若しくは何 Tower など、門の柱に大書する
 を常とし今此パイロン、ハウスと記したる門の扉を排して入れば右に左
 にコンモリと立木五六本生茂り一間四方の小花園に種々の草花を少
 ナヤ、くど裁る附け門より斜に二三間歩みて段階子をトン、くど上
 れば臺所の扉の上に太き鐵の輪を掛け置き之れにて扉を剝啄すれば
 取次が出るの趣向なり但し中以上の家にては臺所口に來客又は婢僕

なぞ記したる引金を据ゑ置き訪問の人は鐵輪ありても先づは引金の方を引きてカチ／＼剝啄を爲さいるが常なり斯くて家内に進み入れば突き當に客室あり其手前より細長く左に開きたるは食堂あり二階は風呂場下宿人の寢室三階は家内子女の部屋にして最下層の食堂の下は庖厨物置等のある所客室には天鵝絨張りの椅子ソハ等を幾個となく列べ一方にはお定まりのピアノ一臺その正面のストロブ柵には此家の夫婦娘の寫眞また曾て下宿玄たる日本人諸氏の寫眞を置き特に丹治某の寫眞は奇麗なる寫眞入れの中に飾りてシビル嬢の寫眞と相對して並べたるも可笑し客室を通り抜けたる處にガラス張り長方形の花室あり今戸焼様の植木鉢に雑種の草花を栽ゑ附けて之を室の周圍なる花壇の上に打ち列べ中には小形の玉臺ありて飯前茗後カチリ／＼の響あり淮亭居士は客室にて此家の主婦を相手に取り浮世話に



675 LADY'S MILE, BOTTEN ROW.

明和(フイター) 黒子(シロ) 黒子(シロ) 黒子(シロ)



打ち興きやうトて雨あめの夕ゆふのつれづれを夫れとちく慰なぐさめ居たりしが主婦は晩ばん餐さんの用意よういにとてシビル嬢と打ち連れて程ほどさく客室を出て行きたれば居士は淋さびしきまゝブラ／＼と例の花室に歩み行きて玉壺ぎよこの縁えりに頬杖ほづえつき唯ぼんやりとして立ちたれども心は水鳥みづどりの足の如く斷問たつとなく働はたらき居たりけり

自問一體丹治と云ふ男は無む分ぶん別の男トや英國の端はまで修業しゆぎやうに来て四箇月もブラ／＼遊んで居て修業先きから電報で下宿屋の娘むすめを呼びよ寄するとは何たる事だソレに彼のシビル嬢は顔こそ十人並あひだけれども格別の教育もなく餘り内氣うちき過ぎて家の始末が出来ある女ではない夫れに此家の庭訓ていんは一ツも涼りやうとした所がない姉嬢あねむすめの逃亡たつぎやうを見ても分わかつて居る夫れども眞實まじつ貫くわんふ氣きを未だ宜いいが妙たに色男いろをとこ振ふつて居ると英國人は眞面目まじめだから飛とだ問違まじがひが起るだらう日本人は女

子に向て容易に戯言を吐く癖があるから女子も其氣合を察して唯笑つて通るけれども英國などでは上等になる程女子が眞實の生娘だから戯言でも丸で眞に受ける夫れを知らずに日本流を持ち出して果ては取り返へしが附かなくなり日本では相應の身分の者が下宿屋の娘を連れて歸るものがあるが丹治も此仲間に入らなければ宜い

○ 自答「イヤ〜是れは丹治ばかりの罪でない其父兄の心得違ひだ日本では西洋にさへ出れば學問が出来て人が利口に爲つて鼻が高くなつて鬚が多くなると思ふが大さう間違つた話トや此間も東京大學を卒業してケンブリッヂに來た男が話して居たがケンブリッヂの學科は東京大學よりも却て易い其等だ英國などでは字引と首引をするのが學校の主意でなく世の中に出て立派ある英國紳士を作り

出すのが主意である彼のハリストルを製造するテンプルを見よ時々法律上の講義があるが出席しても、しさいでも宜い唯三年間出入して月に何回かの會食に出席すれば最後に手短かな試験をして夫れでハリストルに爲る事が出来る詰り學問よりも社會の經驗を先にするのが英國風の教育だから書生を渡英さするなら日本で十分に學問をさせ學成りて之を磨き上げると云ふ處にて始めて送り出すが宜しい十六十七の若書生や二十を踰へても未だ學問の下地が赤い者を送り出して一箇月に百圓前後も使つて田舎向きの内教師位に就きケンブリッヂへ行くと下稽古をするに二三年も掛かる中に學問朋輩の勵みも亦く物淋しきまゝに故郷病が出るものもあらう又丹治のやうな男は懶惰病が出るのは當り前だ日本で子供を洋行させる者は今少し注意して貰いたい者だ併し世に此事を知らぬ父

兄が多く之を知つても西洋風に逆ふのを恐れて之を直言する者が
ない折があつたら新聞にでも投書して十分に痛論してやらすばあ
るまい。

自問ソレはさうと此の家は凡そドレ位の身代だらう場末ではあるが此
位の家では家賃が月に八十圓は出る下女の給料が一人前月に六圓
二人使つて居るから十二圓食事が一人前九圓と見て月に三十圓は
掛るだらうシテ見ると餘程の月入がなければならぬ

自答先刻主婦が公債の利子を四十磅受取ると云つたが三朱利附の公
債とすれば元金が千三百三十三磅日本金にしてザッと小一萬圓を
持つて居る亭主は廣告取次をするさうだから小金を持つて月に百
五六十圓の稼をするだらうし下宿人が平均して一人前月に四十圓
と見て三人ツ、あれば此頭で四五十圓は儲かるし此下宿屋でザッ

と三萬圓位持つた暮らしをして居るが日本では三萬圓あれば金持
の方だ成る程生計の度が違つて居る

此時客室には明りが付きシビルがピアノを掻き鳴らしてミカド芝居
の音曲を聲細々と歌ふ聲

宮さんくお馬の前にピラくするのは何んどやいなトコトンヤ
レナー

貴婦人

西洋諸國にては日曜日に人を訪はぬが常あり特に宗教熱心家は朝夕
寺院の参詣の外家族相圓樂してピアノオルガンに讚美歌を奏し心靜
に其日を送るの習なれば平常交際親しき人が時に相音問して午後
の喫茶を共にするの外別に其閑靜を破るの人あし凡そ西洋の家内にて
は家に因りて多少相違の廉はあれども今中通りの家にて云へば日曜

外の一週六日は朝の八時に朝飯を済まし午後の一時に午飯して凡そ五時頃に茶を喫し夕刻七時前後に至て彼のチンナアと稱する一日中第一番の御馳走に着くとあり然るに日曜日の朝飯は常より凡そ一時間後れて食事の腹に落ち着きたる頃ソロ／＼寺院参詣に出掛け歸宅後午後一時半若くは二時の間に於てチンナアの御馳走を午飯に繰上げ午後四時過に茶を喫して朝の参詣を欠きたる者は是れより寺参りの途に上り午後九時頃にサツパアとてサツパリとした食事を爲す尤も中以下經濟向きの家内は平常午飯にチンナアを饗することゝもあれども是れはチンナアを繰り上げて午後より庖厨に炭火を用ひざるの趣向にて西洋人は之を好まず日中勉強して夕刻家に歸りたる處にて御馳走を受けんとするが通常の人情左れば諸新聞紙に現はるゝ彼の下宿屋の廣告にも Late Dinner とて夜食のチンナアを一種客引きの箇條

とは爲すあり閑話は此邊で休憩として扱て日曜の訪問は先づ以て格外の方あれども英國にて彼の倫敦季節の間は交際社會繁忙にして社交の手廣き人々は一日に幾通の招待狀に接する程にして一週六日は家に閑居するの暇なく唯彼の日曜の一日丈けが此閑居を許すの日なれば訪問する人の種類に因りて却て此日を書むもあり又訪問せらるゝ方も心置きなき客と語るは閑日曜を送るの一法却て之を喜ぶことにて日曜の午後三時前後に折々人を訪問するも交際上の禮には背かずと云へり

斯くと知りたる淮亭居士は米國華盛頓府の知るべより兼ねて貰らひ受けたる紹介狀を携へ或る日曜日の午後二時下りに詩人街を出陣してカンノンベリーと云へる停車場に至り倫敦北部鐵道會社の列車にて是より四ツ目の停車場カムデン、タウチンに到着し此處にてキャブと

云へる小馬車に乗りたり扱て英國各都府にて四辻に客待ちする馬車は多くは此二輪のキャブにして四輪馬車は甚だ稀なりキャブは大なる二輪車にして御者は車の背後に在り斯くて客の頭上より手綱を引くの趣向にして車も軽く簡便あれども其二輪あるが爲め平ある木道石道の外は時に顛覆の恐あり東京市中へ適用などは至て劍呑の事あらん賃錢は一英里三十錢是れより以上一英里毎に其半を増すの定めある由居士は御者に行く手を示して車中に泰然と濟まし込めばキャブはガラ／＼と進行と始めて凡そ二十分をかり過ぎたる頃是れがポートランド町二十五番ですと御者の知らせに車を下りて家の前面を仰ぎ見れば四層の高館巍然として戸口の左手ある窓外には黄緑の植木鉢に房々と草花を栽ゑ附けたるものを飾り今しも一人の若婦人が車の留りたるに心附きて此草花の彼方より窓を隔て、居士の容

子を窺ひ居れり居士も妙な家に來たツイと戸口に進みてピンと引金を引き鳴らせば年若き燕尾服の取次が出て來り居士の紹介狀と名刺を得て輿に行くかと思ふ程あく更に是れへと案内に連れてツト入り込みたるは客室なり室の片隅の椅子に倚りてニコ／＼と例の紹介狀を讀み居たるは紹介の當主たるゴデナツ夫人と申す方にて五十の坂を最早三四段も踏上りたらんかと思はれシャンパン肥と申す者にや顔はツヤ／＼として愛嬌多く善くマアお尋ね下さりました一昨年華盛頓へ參つた時彼の家に二箇月餘逗留しましてツレは／＼誠に面白い家内なこと彼の娘も大分成人しましたらうオヤさうですかあなたは倫敦に長くですか何なり届きます丈はなぞ人を反らさぬ氣合の御手際中々以て交際社會で一方の女軍を指揮するの老将とこそ見えたりける是れより四方山の浮世話に「成程」「ハイ」なぞ云へる言葉を幾百と

なく使ひたる頃、右手の引戸を押し明て出で来りたるは此家の令嬢、年頃十六七と見受けられ色は純白と云ふにはあらねど、アングロサクソンのノッペリと愛嬌なく大理石の肖像を立てたるが如く常に同一様の顔を爲して其變化に乏しき者には似もやらず坐中に一步を進めたる時に其愛嬌は最早この室中に満ち渡りたる程にして金色の髪は稍々、鳶色に變化せんとするの時代に達したれども西洋人中子供の時は其髪に金色を帯びてキラ／＼輝るものあれども此金髪は年頃に至りて漸く鳶色に變ずるを常とす彼の赤みを帯びずして其光澤の上品あるは進化論者の鑑定に掛けて人爲淘汰の長々しき講釋が附さうあ髪に毛装束は如何にもアツサリとして夏向きのみだん衣にやあらんすらん水色に白筋の入りたるものにて外に格別飾りも無く唯喉元に差したるピンに一個の「ダイヤモンド」が止まりて暗窟に住みたる蛇の

眼の如く時にキラ／＼と光を放つあるのみット入り来りて會釋を爲し傍の椅子に倚り掛れば夫人は居士に引合せ娘と申して是ればかり同く華盛頓に参りたる者ありあど漸く話の歩を進むるに従ひ夫人の言に此娘は名をリリーと云ひ最早十六歳に成りたれば是より交際社會に入れんが爲め来る十五日には女皇陛下に謁見させんと支度最中、御存トあらんが英國にては中等以上の娘の子、年十六歳と爲れば交際社會に入るの手始め女皇陛下に謁見するを常とし此始めての謁見は年若き女子の身に取りては實に是れ交際の初陣にして一世の榮譽晴れの場あれば心臆して笑はれぬやう徐かに儀式を終らせし今女皇に謁見せんとすれば先づ宮内大臣に願出で宮内大臣の方にては其家族の品格を見て謁見を差許す可き者あれば夫れ／＼日限を取沙汰して「ハツキングナム宮」に参内せしむ然るに物慣れぬ者あどは或は震ひ

或は顔を打赤めて其言葉さへ口に出でず或は女皇の御手を取りて之をキッスする時に取急ぎて御手を自分の大きな鼻に突き當て女皇も定めて御迷惑なりしあらんかと後にて冷汗を流すとなど無きに非らずリリーも来る十五日には謁見の都合當日胸に纏ふる花は其香めできた薔薇にせんか其名に因みて百合にせんかど今も今どて相談中なり貴下も此謁見日にはハツキングナム宮の近傍にて其行列を御覽せよ見事に出で立ちたる別當が見事に出で立ちたる馬に鞭ち花に埋りたる車の内に年若き貴婦人が裝飾を凝らして宮中に押寄する勢は中々見事にも又上品あるものあり扱て首尾よく謁見が終れば夫れより娘の望みに因りて交際社會に入らしむれども心ある母親は娘の十八九にある迄は餘り多くの場所に出さず舞踏なども折に觸れては一興あきには非ざれども進んで爲すは温藉しからず先づ控へ目に花もあらん

か又私は若き時より毎冬伊太利に遊ぶことを好み伊太利には多くの友達もあり御存トの如く伊太利皇后は交際好きの御方あれば毎度宮中の宴會に御招きを受くるとわれども彼の地は英吉利を違ひ衣服裝飾風雅の流行殊に之れに氣を注げて髪を結ふにも此府中に一人二人と云ふ名人あり貴人の宴會に出づるには必らず此名人に掛ることにてあまたの髪は誰れが結ひましたと問はるゝ時豫ねて名高き誰某が結ひましたと答ふれば此社會にて鼻も高く是れも交際の一なりと云ふにぞ居士は忽ち疑問を起し日本にて近來東髪の流行を生トたる其の首唱者の言を聞くに第一束髪と申すは髪に油を付けざるがゆるに衛生に宜しく第二自分で結ぶことと得るがゆるに經濟に宜し云々との説ありしが西洋の實際に就いて見れば其の結ひ方も種々にして髪を釣りピンを差し殊に毛に焼き金を當て入毛を爲して非常に大

さく巻き上げるは衛生に適したりとも思はれず又自分にて結ぶには
 あらで人の手を假るやうにては定めて費用も多かる可しと云ふに夫
 人は詞を續ぎ費用の掛ること容易ならず宴會の髪は其時限り直ちに
 取り崩すものあれども一度に凡そ十五「シルリング」より一「ポンド」位を
 費す可し随分不經濟のものあれども交際社會に身装を飾るに經濟な
 ど云ふことは語るも要なし衛生論も無益なり例へば藥を眼に差して
 其瞳孔を大きくし耳に輪を箝め紅を差しなせするを見ても衛生だの
 經濟だのと云ふやうな事で裝飾に關するものを論ずるは未だ此社會
 の味を知らざる四角お人の言草あらんと語り出て、リリー共々打ち興
 ずる折柄別室より燕尾服の下男が出来りて奥様お茶席が整ひました

植物園

三風四雨五月花とは是れ英國の氣候にて風には口をムツと結びて風

邪の飛入る門を防ぎ雨には靴の濕を嫌ふて拔足鷺の歩と學ぶ最と鬱
 陶しき三四月を経て扱五月の時節と爲れば空もほんのり櫻色、日本に
 ては五月雨や一年雨が降らば降れども毎度俳諧師の苦情に引き替へ
 英吉利五月は花盛り花を親又觀られんと上下なべて替らぬ人情倫敦
 府にて名高さ公園リゼンド、パークの廣芝生に老若男女打ち集ひ木蔭
 の椅子に腰掛けてさゝやきとよめくものあれば草の席に打臥して顰
 蹙の歌を謠ふもあり或は道の兩側にチユーリップの花の形はコッ
 プに似て紅黃白等の諸色ありの列べるを見て酒客は喉元の渴くを覺
 え行き換ふ馬車中の美人を見て粹士は眼先の疲るゝを知らず小供は
 ポートを池中に浮べ隠居は金魚の躍るを見る世は様々の人心春の景
 色も種々なり抑モリゼント公園は倫敦西北部に位して北端に有名な
 る動物園あり熱帶温帶寒帶の異獸怪禽を網羅して殆んど洩す所なき

は世界第一ありとの評判あり是れは公立の動物園にて衆の縦覽に供すれども公園の南方に當りて名高き私立植物園あり花木を愛づる金満家若くは植物研究に心を寄する人々の私財の設けに係るが爲め之を縦覽する者は會員の紹介を得る筈にて此處に集まる人々は何れも歴々の士女のみあり今日は五月も半過ぎ殊に土曜日半ドンなれば園内の群集は大方あらず植物園の近傍は晴衣眩ゆき貴婦人方往來散步織るがごとく最と賑かある門先さへ黒塗り二頭立の箱馬車がガラガエ／＼と來かゝりて恰も門前に立ち止まり馬丁が開きたる馬車の戸よりヌツと出でたる一人の准亭居士と知られたり新らしきモーニング、コートを着けて絹の高帽を目深に被り一寸會釋して腕差し伸ぶれば黒地に黒房の下りたる最と美事なる絹服の胸の邊りに金鎖もてメイヤモンドの飾りを垂れ光澤麗はしく肥りたる顔一杯に笑を含みて

ヤオテ居士の腕に掛りシツ／＼と馬車を下りたるは例のゴテナツ夫人にして續て十六七の令嬢、アツサリとしたる花帽子を左の手にて押へながら右に八つか九つの未だ幼き弟を扶け共々馬車より現はれで頓て植物園の内に入り種々珍らしき草花をアレよコレよと評し合ひせ、ミ―と云へる件の童子が萬事に疑問を生ずる年頃お母さん彼の花はあんていふんですか「直ぐ散はしませんか」なぞ云へる問題を出す毎に母ある貴婦人は懇に花傍に樹てたる標札を指し「せ、ミ―彼の標札には本草學の説明があるからアレを讀んで御覽をさいオヤ／＼」アノ花は椿の種類だとか云ひかゝい「なぞ一々疑問を説き明かして小供心の發達を飽まで助くる注意の程世間の母が子供を叱りて其問ふ所に答へもせず果ては僻心を起さす無智の振舞に倣はざる抑も此ゴテナツ夫人と申すは貴族アベルギーン家の嫡女にして家柄と云ひ教育と

queen of beauty.
queen
queen
queen
queen

云ひ最と奥ゆかしきは申すに及ばず詩歌音樂の道にさへ深かりしかば妙齡二八、女皇陛下に謁見して交際社會に現はれてより何れの宴會に至りても座客の北斗たらざるあく世に云ふ *Queen of Beauty* とは實に此姫君にやと噂するものさへありしが或る時倫敦府に名高き劇場ラ イセアム座の機敷より誤りて持ちたる扇を落したる其時士間に居合せたるゴデナツ大佐が之を拾ひて恭しく姫に返へせしより姫は常に小説を好んで當夜の事の何とかく小説らしきを愛て給ひ其後大佐と交りて王侯貴人の姻談を避け遂にゴデナツ夫人と爲りたりと云ふ斯くてゴデナツ夫人には其心操優しくして身分家柄をも打忘れ一たび手を握りて交はれば誰れとて之を慕はざるものあき程あれども並々あらぬ貴婦人あれば思ひ寄らざる人に逢ふて親しく之れに交はるとあり即ち准亭居士の如き一本の紹介狀に因りて夫人と相知りたる迄

あれども遙々渡英の事あれば萬端不便勝ちある可し急ぐ旅路に非ざれば我家に客分たる可しと夫人の動議に大佐も同意し居士はゴデナツ邸に移りて既に一週間を経たれ共ゴデナツ一家は交際廣く此處の宴會、彼處の音樂、案内されずと云ふとあく又折々は自宅にてソワレ、コンパリーサセオチ杯種々の集會を催はして多くの客を延くものから居士は此家に客たりしより珍らしき人と相知りて其談話を聞くに附け利益すると少あからず今日も午後の散步にとて夫人親子と連れ立ちてポーランド街より程遠からぬリセント、パークの植物園に馬車を軋らせたりしなり抑も此ゴデナツ夫人には男女三人の子供ありて長子をヘンリー、ゴデナツと云ひ今年二十四歳にしてオックスフォールドの大學に入り經濟學科を研究中あり次ぎは今日伴ひたるリ、ーと云へる愛嬢とせし英國にては子供の名を呼ぶに便利の爲めウヰリヤム

をウヰリーと唱へチャールスをチャールレーと呼びセイムスをゼミー
と稱する等の例ありと云へる幼弟のみり、一は年未だ若きが爲め植
物園に入りてより草花の美事に咲けるを見て心嬉しく笑顔を作り小
さき蝙蝠傘を翳しあがら弟の手を取り足速に池に架けたる橋を超え
何時か向ひの林を隔て、打ち笑ふ聲さへ遙かあり居士は夫人と談し
ながら今を盛りと咲き出てたる薔薇花に向へる腰掛に休み

居士今日は土曜日のせいか大さうあ人出で御坐いますアレ彼の森
の中からも一組の淑女連が現はれましたッ

夫人「お天道さまが久し振で謁見仰出されたので子供も年寄りも男
も女も家に落着ては居られませんか此大勢の人が公園杯に集るのを
見ると私は何時でも思ひ出しますが昔し當國の或る名高い詩人が
Circumstances(事情)と云ふ題で詩を作つた其大要を申せば或る村に玉

の様な女の子を産んだものがあつて蝶よ花よと愛で育てた處が月
日は速いもので其の女の子が最早十八と云ふ年に爲ると美人の許
判が高いものだから俗に云ふ曳く手あまたで或る夜鎮守の祭禮に
風と或る美男子に思はれて互に憎からぬ中と爲り然る可き媒妁人
を求めてトウ／＼夫婦と爲つた處で鴛鴦中睦トウ願て又玉のやう
ある子をもうけて偕老同穴を遂げたる頃には其子供等が成長して
親の爲したやうな事を爲し彼れ是れする中に孫も亦右同斷の事を
爲したのでつらく／＼考へて見るに今の世の中の人には日本でも英國
でも世界何れの國々でも親より子、子より孫と右に陳べたる事情が
終始循環して居るものだど斯う云ふ意味で面白く作つて御座いま
すが成る程夫れに違ひないア、彼處を行いて居る人々あとも皆あ
此事情に支配さるゝので文明人も野蠻人も皆んな同ト事では御座

いませんか夫れども何か違つた事が御座いませうか
 と夫人は蝙蝠傘の柄の上に両手を突き少しく笑を含みながら居士
 の返答を待つものゝ如し元來夫人は文學を好んで英佛諸學者の著述
 に涉獵しホーセツト夫人グラツトストン夫人等とも親交して最も教
 育の事に熱心し如何なる問題にても教育と云へる一つの鍵を以て解
 くの癖あれば居士は又例の教育論が出るだらうと覺悟して手早く一
 本横槍を入れ其論陣を崩さんと乙に言葉を捻りながら

居士仰せの通り文明人も野蠻人も生きては死に、生きては死に同ト
 事を繰り返へす丈けの事でダルウキン先生の御説に人間は猿と先
 祖を同くすると云ふのは御尤千萬、何時ぞや米國の或る婦人が男の
 煙草を呑むのを攻撃した時、私の友人が説を出して凡そ動物は人間
 の爲す事を爲すもので人間が酒を呑めば猿も酒を呑む人間が欠伸

すれば猿も欠伸する唯猿は煙草を呑めぬ左すれば人の煙草を呑む
 は其禽獸に異なる所トやと申したので米國婦人も大閉口を致しま
 した。が人間と動物の差でさへ是れ位のものだから文明人だの野蠻
 人だのと云つた處が潰しにすれば人間一疋、目方が十五六貫しかあ
 りませんヨハ、ハ、ハ、ハ、
 夫人又御戯談が始まりましたチマア能くお聞かさい文明人も野蠻人も
 アノ事情に支配さるゝのは同ト事ですが此間に大きな違が出来る
 のは教育です教育と申ても學校の教育ばかりでは御座いません家
 内の教育もあれば世間の教育もあります教師も學校の教師ばかり
 では御座いません良父母は家の教師で長老先達は世間の教師で御
 座いませうグラツトストン氏は政治社會の教師でウナルスレー卿
 は軍人社會の教師でヘンリーアーウキンは俳優社會の教師でデニ

ソンは詩人社會の教師で御座いませうソシテ好い教師の多い國には好い書生さんが多い手早く此植物園を散歩して居るものを御覽下さい男子は婦人を扶け若者は年寄を敬て上品に行儀が好では御座いませんか是は野蠻人の出來あひ事ませう此氣風はせうじて出來たのですか社會の教育でせう政治の能く行れるのも商賣上に信用が厚つて繁昌するのも皆此教育から起のですから貴下も英國の事をお調あさるなら一番先に此教育の事をお調あさいコレさへお調あさればドンも疑問でも解けあひ事は御座いません

と夫人が滔々陳べ居る處へり、とせミ一は園内を廻はりて頓て此處に立ち返へり

り、「お母さんナせ此處にばかりお出でるのでですか准亭さんはお出でたばかりでお行るさあさらあいのですかオホ、、、、

夫人「お母さんは蓄薇さへ見れば澤山だヨ

せミ一「もうお茶の時にありますヨ

居士ソレではもう退陣お仕らん女將軍如何で御座る

一同「アハ、、、、

と之を合圖に一同打ち連れ頓て門外に待せたる馬車に打ち乗り程遠からぬポートランド街の館に歸り居士は自分の部屋に入りて手を洗ひなぞする處へ給仕人が一通の手紙を黒盆に載てコックと部屋の戸を叩き恭しく之を差出すに居士は手紙を取り上げて披き見れば拜啓當地大學の模様御見物相成りたき由兼ねて御話之れあり且つ母よりも貴兄御光臨の日取御知らせ申上げ候やう申參り候に就ては來る二十一日御鳳來の事に相願ひたく其翌二十二日の夜には大學書生の芝居も之れあり外題はシェークスピアのシーザーと相極

り候ゆゑ是れも御遊覽の一興と奉存候追て停車場に御出迎へ申度候間御出發の時刻御電報被下度候餘は拜眉に讓る

千八百八十八年五月十八日オックスフォールドに於て

ヘンリーゴデナツ

淮亭老兄梧下

オックスフォールド大學生

淮亭居士はヘンリーゴデナツの手紙を得て來る二十一日には有名なるオックスフォールドに遊ばんと指かゝなふる暇もあらず當日の正午頃とも爲りければゴデナツ夫人の親切ある早くも午餐の用意を整へ程あくる馬車も來りたり居士は手荷物あせ取敢へずパツチントン停車場より一時の汽車に乗り込まんと頓て停車場に至りて見れば流石に世界最大の停車場丈けありて地上地下の鐵道線路は其幾十條あるを知ら

ず居士は且つ驚き且つ感トポーターと云へる手荷物世話方に誘はれてオックスフォールド行き切符を買ひ夫れよりヘンリーの許へ向け午後一時出發の旨を電報して保守黨の機關なるスタンダードと自由黨の新聞なるデーリーニューズと此反對二様の新聞紙を購ふて仰でステーションの時計を見るに最早一時に間もなければイヤとて列車に乗込むに上等室は片側五人都合十人入りよして今日は旅客も最と少く他に合乗の人もあければ新聞と讀むには偏強あらんと先づデーリーニューズを取りて其見出を一瞥するにジョンモレー氏の演説と題する一項あり抑此ジョンモレー氏と云へるは自由黨の急進派に屬し代々文學の名家にして父祖の著述も甚だ多く年少オックスフォールドの大學に遊びて才學夙成の評判あり成學の後身は身を政治界に寄せて其名聲隆然として起り演壇に立て論鋒の鋭利なること殆んど其衝

に當るもの亦く自由黨中の先鋒隊として敵の堅陣を打ち破るに向ふ所人なきの勢あり斯くて當日の新聞紙に載せたるは蘇格蘭エヂンバラ一府なる自由黨諸氏の集會にて現愛蘭事務大臣バルフチャール氏の政略を攻撃したるものにしてバルフチャール氏は政治術の「いろは」をも知らざる者ありと説破して中には嘲弄風の口調と用ひたる所あれども愛蘭自治の要を説くに至りては氣鋭鬱勃その勢當る可らず聴衆一萬二千人ばかりにして満場の喝采鳴りも止まざりし云々として一語も洩さず記載したり居士は餘念なく讀み了り保守黨の新聞紙にては何んど之を記載せしや日本赤どの新聞紙は黨派の異なるに隨て尤で反對の報知を載せ雪やら炭やら之を判断するに苦しむことあれども英國の新聞紙も矢張り同様の者あるにや新聞記者の根性は大抵似寄りたる者あるにやとて今度はスタンダード新聞を取りてモーレイ氏

演説の處を見るに演説の主旨は固より論なく聴衆の員數喝采の要點多少の詳畧はあるやうあれども聊かも私意を交へずして有りの儘に之を記載し唯デリーリニユウスの方にて最も緊要ある場面に載する處をスタンダードの方にては左まで目立ぬ處に掲げ一方にて活字を大きくして仰々しく場面を塞ぐ處を一方にては文字を小さくして成る可く紙面を塞かざるが如き氣味あるのみにして何れの新聞を見てモ事實に黒白の相違なきは流石に文明國人丈け政治上にも大人氣ありとて獨りポツ／＼首肯し居りしが二時間餘の長演説を雙方對照して讀みたれば新聞紙も最早厭き果てたり風とガラス戸より見廻せば天氣は所謂薄日和にて問柳尋花弄淡晴を云へる風流人には誠に御詠向きあれども雨と霧とは英國の名物今夜は雨と睨みたるはヨモ僻目には非ざる可し抑も倫敦よりオックスフォードに至るに鐵道線路二

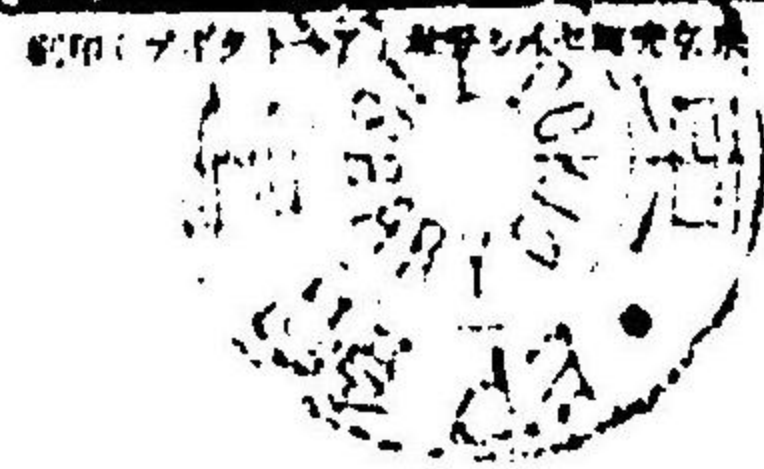
條ありて一は近く一は遠く近き者は四時間にして達すべく居士の乗り込みたるは手間取れる方にてテームス河を二三回も渡りて凡そ五時間ばかりを費し平遠閑淡柳樹の河岸に生繁る牛羊の牧場に行列する宛から油畫の中に在るが如く英國の領土内には太陽の没するところと云へる其廣大ある領土の膏血を絞りて斯る小島の裝飾に塗りとるとおれば田舎家屋の立派にして途上見る處の家丹壁白堊ならざるかく林杪參差の處に於て高く煙突の屹立するなど西洋他國の田舎に於て復たと見當らざる處あり居士は此風景を眺めながら五時間餘の汽車旅も長さを覺えず汽笛の聲一層高きに心附きて風と懷中時計を見れば六時を過ること十五分間もかく到着したる停車場は即ちオックスフォードにして居士は列車を下りながらヘンリーは迎へに來り居るやとキヨロ／＼見廻はす其時に大きな柱の彼方より一人の年

若き朋友を伴ひツカ／＼前に進み寄りて「イヤ只今お着きですか」と手を差し伸べて一禮の後その朋友を紹介して「是れはウヰリヤムグレシヤム氏と申して僕の極親友です處で僕は君の爲めに此人の下宿の明間を借りて之を行在所にする積りだがステーションから遠くもないから手荷物だけはポーターに預けて是れから行いて参りませう」と三人打ち連れ停車場を出で彼れ是れ話して歩行するまゝ最早下宿の前に來りピンと引鈴を引き鳴らせば兼ねて待ち設けたる事と見ゆ此家の下女が立ち出で、イヤ此方へと案内に連れて先づ客室に打ち通り暫く談話する中に旅の疲れを休め給へ後刻又々相見んとて二人は頓て立ち去りたり引違へて此家の女主人年の頃は四十五六身装も左まで卑しからず田舎堅氣の心安く當年十九か二十ばかりの娘を伴ひ出で來りて扱て對面も濟みたる後萬事不行届きの挨拶などありて夫よ

り食事の習慣を尋ね更に寢室へ案内したり凡そ西洋の習慣にては手を洗ひ口を漱ぎ又衣服を着換へる等通常寢室に於てするが故に居士は晚餐の用意にとて先づ盥漱を終りたる頃は最早七時半にして食後再び客室に入り手摺附の椅子に倚りてヘンリー始め友人の尋ね來るを待つ折柄居士の睨んだる鑒定に違はず雨はポツ／＼降り出したり煉瓦屋は雨を聽くに便ならず繞檐點滴如琴筑など云へる面白味はなけれども倫敦の如き繁華の場所より俄に田舎の閑靜に入れば憶在錦城歌吹海、七年夜雨不曾知の趣なきを得ず兎角する中ヘンリーは友人二名を誘ふて來り例のグレシヤムも出で來れり何れも日本人珍らしき連中なれば問ふ處區々にして

問「君は我が英國を好まるゝや」

答「英國の夏は大好なれども名物の霧には閉口です」



問「國會議員の討論は最はや御聴聞をさいましたか」

答「イヤモ一度々参ります」

問「誰れの演説がお好きです」
答「グラットストン氏の演説は取り除けず、彼の人の音聲は音楽のやうで、迎も真似の出来ぬ天性ですが、外に誰がお好きです」

答「ランドルフ、チャーチル卿も中々旨い、ハースキールト氏も諧謔嘲弄の上手ある丈けは感心だが、先鋒隊の技倆で首領の口氣としては感心しませぬ、併し音聲が音楽のやうだ、何んのとそん事分りませんが、論理の正しくして、氣餒の盛んあるは、シヨンモレイ氏でせう、今日の新聞紙に出たエギンバラの演説などは、近來の名論だらうと思ひます」

此時ヘンリーはウヰリヤムと願みて「淮亭君もパルチル黨だヨ君は」

人の味方を得たヨ併し」と云ひ掛くるとき他の一人は保守黨最負のものと見ゆ併しバルチル氏の一代中には何程骨を折つた處が愛蘭自治案を實行する事は出来ないだらうと後の方より横鎗を入るればウヰリヤムは熱心に「其事あらば御答致さう凡そ正人君子と申すは唯正道と信トたる所を行ふあるのみで事の成否は第二に置くではありませんかバルチル氏は愛蘭の慘狀を見て自から黙視するに忍びず一身を以て之れに當るので眞の正人君子ですバルネル氏の系圖を御覽ささい先祖から英蘭に住居したのみか代々政治文學の名家を出して内閣員に列したる者もあるでせう代々名族門地に加ふるに今のバルチル氏の才略を以し自由黨より保守黨なり何れかの黨派に加擔して愛蘭の慘狀などは見ぬ振りをして過ぎ去りたらば何れかの内閣に列座して飛ぶ鳥を落すの權勢を得凡俗の尊重する處と爲るは誠に容易な事

ですが仁者惻隱の情禁せんと欲するも禁す可らずで世間の人より國賊と呼ばれ或は暴人と評さるゝも唇を忍んで敢て慍らず正道を踏んで徐に順運の回るを待つ是れが他人に出來まい事です英國近代の政事家中でバルチル氏位困難の位地に立つものはありますまい夫れだから近日議員補欠撰舉の結果を御覽なさい自由黨即ち愛蘭自治案贊成家が到る處に多數を占るではありませんか」と云ふ時最前より待ち構へて口をムツ／＼動かし居たる一人は「イヤ是れグレシヤム君去年の十月からパーミングハムを始め五ヶ處の撰舉を御覽ささい撰舉されたる議員の數は自由黨の方が一人多いが互に雙方の投票を合せて其過剩數を比べると保守の方が多くあるとスタンダード新聞に出て居ましたぞ其新聞紙の切り抜きを御覽に入れやうドレドボツケットを搜したれども見當らぬ様子にて二三分時間を費す中に皆々疾くよ

り政治論に倦み更に新談題に移らんとする折柄あれば居士も左る者
 その機を外さず明日興行する書生芝居の役割等を尋ねたるにぞ座中
 の人氣之に向ひて以前の政事家論は何時の間にか幽霊の如く立消ど
 爲り折も折とて下宿の娘が大きな盆に咖啡を載せ薄く切りたる食麵
 包にバターを付けたる茶菓子を携へット會釋して入り來たれば人々容
 を改めて或は茶碗を人に傳へ或は菓子を勸むる等その行儀至て正し
 く以上此席に列する者は何れも一介の書生あれども多くはモーニン
 グ、コートを着け晚餐の時に梳りたる頭髮は尙ほ其秩序を亂さずして
 立派と云ふには非れども一見決して卑しからず日本の書生が蓬髮粗
 服故らに其身装を粗末にする等の趣に比すれば頗る相違するもの、
 如し又其談話する處を聞くに坐して言ふべく起つて行ふべき説を執
 りて實着に之を論すれども漫に其磊落を示さんどて大言放談する等

の事あるを見ず人苟も説を吐けば其説に對して責任を負はざる可ら
 ずとは英國德義上の義務にして父祖習慣の致す所書生の氣質も自然
 之れに則るものあらんと居士は頻りに感嘆したり兎角する間に時計
 の針は脇目も觸らず進み去りて最早十時の所に達せり淮亭君はお疲
 れだらう明日お目に掛りませうとヘンリーの勳議を賛成して一同居
 士に暇を告げ居士も諸人を送りたる後程あく寢室に赴きたるがガラ
 戸の隙間より洩れ聞ゆる雨聲の睡と促がして未だ十分も過ぎざる
 に華胥の國へぞ遊びける

グラッドストーン氏の舊宅

グラッドストーンと云へる六尺の肉塊は實に世界の名物なり其雪の如
 き白髪に埋りたる頭その音樂の如き調子よき聲の正直にして凜々
 しき顔は滿世界の人をして敢て一見せんとするの念を起さしむる名

物あり此名物は英國チエシヤあるハーデン、カッスルと云へる一箇の城郭に常住するを以て夏期保養者の人にて此城郭を見、又彼の肉塊を見んとして態々杖を曳き車を枉ぐる者も甚あからず元と此ハーデン、カッスルと云へるは由緒ある古城迹にして境壁斷垣今尙ほ其遺跡を留め此遺跡に倚り添ふてグラッドストーン氏の邸宅あり堅固なる石造館にして綠色添ふ蔦の葉は一年三百六十日青き衣を此家に打ち掛け古色蒼然の趣あり庭には四角形の花圃幾箇となく散布して花は色々時候に随ひ我れ勝ちに主人の目を慰めんとするもの、如し館内には修静堂と稱する書籍館あり主人は其中に閉籠りて得意の古代歴史などを取調べ又大得意の三時間四時間に亘る長演説の材料をも取調べることなり此ハーデン、カッスルを見物せんとして夏期此に集まる人は唯家のみを見て歸るも本意なし餘所あから主人に見參して其健

康を祝せんと時に幾十百人とあき此古城の邊に集ひ主人が園中に散步する時を待ち受け帽を振ひ手を拍て欽仰の意を表すれば主人も心嬉しきにや次第に群集人の方に歩み來りて快げに之れに挨拶すれば群集人はグラッドストーン氏よ大老人(英人グラッドストーン氏を稱して Grand old man 即ち大老人と云ふはブラットロー氏がノルサムプトンの演説中此語を用ひたるに起因して今は通稱の如く爲りしと云ふ)よ盍んぞ其口を開て我々に數分間の音樂を聞かしめざるを述る者あれば人望を取る政治家の常としてスゲあく黙する譯にも行かず老體とは爲りたれども國に盡すの精神は少しも少壯の時に減せず諸君も何卒御安心あれかしと云へる詞の中に多少の政治主義をも加味して十分十五分の間淀みもなく其舌を回せば人々何れも満足して打連立て歸り去る是れチエシヤなるハーデン、カッスルの状況あれども抑も

此グラッドストーン家は是より先き英國リヴァプールに住居したることあり氏の甥たるロバート、グラッドストーン氏の如きは現にリヴァプールに在て同地の顔役の中に列せりグラッドストーン氏の時代となりてモリヴァプールに住みたること年久しく氏の舊宅は同府シェーク街に在りリヴァプールに滞在する人は大老人の舊宅とあれば是れも名物なり見まぼしどて甘棠伐る勿れの遺意にやあらん其人を敬して之れに縁故あるものに及ぶは亦是れ人情の自然ある可し居士はリヴァプールに滞在するの際、同地の一紳士と共に氏の舊宅を訪ひたることありしが今はドットル、グリーンと云へる醫者の住居にしてグリーン氏は同行の紳士と懇意なるに加へて日本の人が態々見物に來りたりと聞き痛く打ち喜びて家内の案内を始めたり先づ突き當りて臺所に入れば帽子掛けあぶを置く所あり夫より石壇を二ツ三ツ登りて突き



當りの引戸を開けば直ちに客室に達す可し此客室は至て廣く日本の
疊なみあれば七八十疊ならんと思はれ室の左手の戸を開けば鳥渡家族の
住まふ可き小室あり此小室は食堂に隣して前面の庭と相對し庭は四角
形にして周圍に多少の樹木あれども左まで餘裕ありども見えす此室
より二階に上りて一書齋しよさいあるはグラッドストーン氏の勉強室べんきやうしつなりしと
云ふ今は室内の飾付等も換はりて舊意匠きういしやうを見るに由よしあけれども斯か
る小室より彼の大老人を出したるかと思へば又一層の感情かんじやうを生うて
暫く彷徨はうかうして去ること能はざる程なりき是より三階四階はあれども
何れも家族の寢間等にて見る可きものにも非ざれば先づ此書齋の椅
子に倚りてグラッドストーン氏の噂うわさばなしを始めたり此談話中グリー
ン氏の言ふ所を聞くに英國の富は年々歳々増加すること異常いじやうにして
今グラッドストーン家に就て云はんにグラッドストーン氏の父は羊毛仲

買并に砂糖賣買等を業とし西印度に所有の砂糖島ありて數多くの黒人を使役したりしが其後彼の黒人解放の説ありしかば此頃グラッドストーン氏は始めて政治界に現はれんとして國會議員の選舉を争ふを機會に其撰舉區民に對する演說中黒奴は終に解放せざる可らざれども今俄に之を解放せんとせば從來の所有主に對して幾多の損害を生ず可ければ漸を以て之を解放するに若かずとて暗に自家の利益を辨護せんとしたることもあり此演說はグラッドストーン氏の如き自由家の口より發したるものとしては甚だ不似合あるものなりとて後々人の口の端にも掛ることおれども兎に角グラッドストーン家は當時多くの黒奴を有して身代二萬磅位もありしならんと云ふ當リヴァプールにて今日二萬磅位の身代は樹を以て量る可き程澤山なれども當時グラッドストーン家が當府中の金満家として人に重んぜられたるを見れば

富の進歩の著るしき事自ら窺ひ知る可きなりなど物語れり夫より更に話頭を轉トてグラッドストーン氏の健康談に及びたりしが其頃グラッドストーン氏は愛爾蘭問題に付き三時間ばかりの長演說を爲したれば主人グリーン氏は説を爲してグラッドストーン氏は實に近代珍らしき政治家にして其珍らしきは第一其身體の健康に在り英國古來の政治家中にて年老ひたる迄政治社會に在りしは彼のバルマルストン卿にして卿は八十二歳まで總理大臣の位地を占めたれども當時一切の政略實務は卿の自ら爲したるに非ず卿は其名望を以て政府の重きを爲したるのみ然るにグラッドストーン氏は唯飾り大將として政治社會に立つものに非ず大將たり又兵卒たり自ら進んで堅陣に當り鋒を執て他と相闘ふの勇氣ある其年はと云へば然も八十歳にして此後バルマルストン卿の年に達するも今日の勢を持ち張りて自ら案山子た

るを甘んせざる可し御承知にても候はん三四日前の新聞紙にグラッドストーン氏が下議院よりの蹄掛け馬車にも乗らずボツ／＼と市街を歩み來りたる時遙か向ふの辻馬車が年老ひたる婦人を衝き倒し見向きもせず走せ去るを見て氏は例の正直ある性質にて斯かる慘狀を見逃す能はず自から馬車に駆け附きて御者を巡査に引渡したりと云ふ誠に些末の事なれども亦其氣力の盛んなるを見る可し蓋しグラッドストーン氏は一種例外の政治家なり凡そ何れの政治家にても年老ゆれば其諒保守に傾き易きものあれどもグラッドストーン氏は之れに反し其政治界に入りたる時は却て保守の氣を帯びたれども其後次第に自由説と爲りて近頃にては撰擧權擴張を論ト又愛爾蘭の自治論に賛成する等愈々出で、愈よ急進説に傾くは世界古今に其例なきものあらん只今お互に談話する此部屋の内居たるグラッドストーン氏は世

界中に名物視さるゝに此グリーンなどは永年同ト部屋に住みながら狭きリヴァプール中にても餘り人に知られざるとは同ト人間にも斯くまで違ひのあるものかと此部屋に居る毎に毎度自ら感慨することばかりとてグラッドストーン氏の舊宅中に醫者の述懐談を聞きたるは幾ど面白き事ありき

羅生門

綱は仰せを蒙りて羅生門へぞ着にけるとは昔の鬼物語なれども近時文明世界の鬼は頭に角ある鬼のみに非ず婦人女子の如き好男子にして内心如夜叉、悍猛怖るべき所業を働くものなきに非らず頃は一昨年夏秋の交、倫敦東部に一場の鬼物語を生トて一時歐洲社會を驚かしたることあり抑も此鬼は何の目的を以て人を殺すものにや終に其理由を知るに能はざれども殺されたる人は何れも賤しき娼婦のみあり之

を殺すには先づ刃物にて喉元を劈き聲を断ちて然る後に耳を切り手を截り或は卑陋の部分までも切り抜きて何れへか持去る其迅速あること譬ふるに物なし街道にて或る娼婦と語り共に待合に赴きて其部屋をべめ切り娼婦に酒を振舞ひて其寢息を窺ひ例の切り抜き細工を作して徐ろくと遁げ去るに慥に其容體を見たる者なく唯この待合の主婦などが裁判所に引出されての口供を集め見るに脊は餘り高からず顔に髯ありて色は小黒く談話の調子は鼻に掛りて亞米利加人には非らずやと思はるゝことありなぞ云へる位にて格別是れぞと云ふ證據物もかく其切り抜きたる肉は何の用に爲すや人を殺すは醉狂の爲めか或は他に目的あるか其喉元を切り或は肉塊を切り取る手練の立ち勝りたる所を見れば或は牛肉屋の亭主を以て平常肉を切るの妙を得たる者ある可しとの鑑定もあり或は此鬼は醫者にして切り

たる肉に付き何か試験を爲すの考あらんと云ふ者もあり或は其娼婦に限りて之を憎み之を殺すを以て此怪物は宗教固執家にして倫敦中に私娼の盛あるを憤り一を殺して萬を懲し其横行を制するの意ならんかと理窟を付ける人もありたり然るに此倫敦府は人口殆んど五百万にして世界無類の大都府あるにも拘はらず蘇格蘭ヤード秘密探偵局ありて其探偵の鋭敏嚴密なるは他に比較す可きものなき程にして或る時在倫敦日本人中餘り金使ひの荒き者あり其筋の人は不審の餘り其舉動を穿鑿せしめんとて蘇格蘭ヤードの探偵方に依頼したるに一舉一動何れの處にて酒を飲み何れの處にて煙草を買ひたりと云ふへる事まで穿鑿したる其微密なること實に驚くばかりありしと云ふ矧して大罪人の穿鑿には中にも秀でたる探偵吏が充分の力を盡くすが故に天網の密ある亦一層なるべきに例の怪鬼は不思議にも此探偵

吏の手を潜りて或は一晩置きに或は一週間を隔て、次第くく七人を殺し一人を傷けたりければ警視探偵日夜搜索に手を盡くし居たる折柄何者の所爲とも知れず倫敦の或る名高き新聞社に一片の郵便端書が到来したり其文の大畧に

拜啓私儀少々所存有之隔日若くは隔週に一人づゝ人を殺し候得共警視廳にては御寛典を以て未だ私を御捕へ無之自由に相働くことを得候段誠に難有奉存候尙ほ此後も勉強して幾人どなく相殺し可申候間随分御氣を付けて御探偵可然と奉存候云々

ジャックセリッパ

月 日

とありければ何所よりして此書面が到来せしや之を探偵する其中に又もや人殺しあるやうの次第あれば流石に廣き倫敦にては此鬼の所

爲に避易して女子は先く夜行せぬころ安心かれとて物蔭暗き所などは餘り通行せぬ程の勢に至りたり此時や淮亭居士は倫敦中央西部の或る奇學者の家に止まりたりしが此學者は最も歴史學に長けて其得意の著書中には獨逸學者の一説に係る耶蘇は政治上の功名心ありし者ありとの事跡を探究したる者あり平常奇を愛し事を喜ぶの氣象ありて彼のクリケット、テニス、蹴鞠など云へる勝負事を好み野外の運動を怠らず仙骨稜々、浮世を離脱したるが如き其中に子供らしき好奇心を蓄へたる一種異常の人物にして其生計に不足なく豫て懸念ある人の中にて歴史文學などの教授を請へば心易き儘に相語りて終日倦まざるが如きことあり居士も此人と相知りて文學上の談話などに得る所尠あからず又と得がたき奇友人として其家に止まりたりしが此際彼の奇鬼の倫敦東部に現はれたりければ奇學者果して之を奇

として黙して止まること能はずイデ此鬼を發見して蘇格蘭ヤード探偵吏の腐れ目玉をデン繰り返さんどの大望を起し一夕晚餐後に其動議を起したるに居士は第一番に賛成し續きて佛蘭西人にして未來國會議員と自稱する一紳士同トテールブルの片隅より手を拍て又同意し奇學者先生の甥にして倫敦手形交換所の書記たる年頃二十五六の若紳士も共に勇んで此一行に加はらんと満場一致したりければ彼の奇學者先生は桃太郎が鬼ヶ島に渡らんとして犬雉等の從屬を得たるど一般其得意一方ならず黍園子の代りとしてブランダール一本を腰間こしに帶び佛蘭西紳士は例の決闘支度にてピストル一挺をポケットに隠し若紳士は太き鐵棒を提げ居士も手ごろの杖を得て共々倫敦東部に向ひテヨークワーム停車場より漸く東してシヨークワッチの停車場に着し是より下車して右手に進めば彼の鬼が第一番に人を殺し

たるコンメルシャルロードと云へる幅の廣き汚穢ある街道に出でたり扱て此街道には瓦斯も光りて足に靴あき貧乏子供或は生れ落ちてよりツイ湯に入らず千秋萬歳の垢に埋りたる職人それより味噌漉籃を提げて八百屋の前に勇辨を奮ひ井戸端會議に議長と爲り亭主を火箸で擲ぐると云ふ唇厚くして舌輕き婦人あそが往來に充満する有様は中々賑やかなる様子あれども此大通を横道に曲れば道幅狭くして瓦斯の光なく忽ち暗黒世界とありて鼻を摘まゝるゝ事さへ分らず五層六層の大貸家一間ばかりの小路を狭んで兩側高く打並べば恰も谷底に落ちたるが如く晝間この谷上の子午線には太陽三十分間以上は止まらざるべく左なきだお霧暗き倫敦府が今夜は又格別に暗くして是れすら人殺しの見附からぬも道理と覺束あくも進み行く遙か向ふに足音あるは只の人間にはあるまじと奇學者先生が戯れに云へば佛蘭

西紳士はピストルに手を掛け寄らば撃んと待ち掛けたる様子、鐵の棒と櫛の棒は前後左右を固めたれ共足音は此方には來らずして何時の間にか聞えず爲りぬハ、一鬼も引けたなど勇氣を鼓して又進めば亂石凹凸の小路とあり之を上り詰めたる處にホノ暗き瓦斯燈一町の間の一ツ二ツ露隠れにボンヤリとして日本にて申さば此瓦斯燈の上より柳が枝垂れ白井權八流の男が懐より手紙を出して之を讀むか若くは五十兩入りの編の財布を明りに透かし見てニッコリと云ふ場所柄あり凄さも凄し千金の身を以て斯かる危地に入り込みたる事ア、吾ながら恐ろしく、イザ引返さんと居士が云へば奇學者先生頭を振り否々是よりが肝要の場所あり聞く此邊はシエウ人の巢窟、吝嗇、貪のシヤイロツンは實に現世にありと云ふアレ御覽せよ彼の戸口に何やらん横文字の書きたるをど云ふにフト之を見れば總べて希伯語にて

綴りたる然るに奇學者先生は兼て希伯語の名人にして其貼札などに付き是れは貸家と書きたるあり其れは何方へ轉宅の印なり又彼れは賣藥の看板にして其効能書ありなど事細かに語り出で、得意の色を顯せり是より突き當りて右手に曲れば又々暗き處に入り込み一層進んで右に折れ左に曲りて終に少しく幅の廣き町に出でたるに此所には多人數折り重りて炬火を燒きたる前に集り大小の聲々喧しきは何事あらんと近寄り見ればコハソモ如何に此程より彼の鬼の手に掛りたる婦人の像を蠟細工にしてエグリ取られたる切口より血の淋漓として滴る有様、残酷を極めたる者を飾りて入らつしやい、木戸錢は僅に三ペニー見るは一時話は末代と日本と同一やうな口調にて客を引き居るも亦可笑しく其近傍を見廻して又一群の人立あるは即ちウキツクドクトルなり呪咀と賣藥を突き混せて辻商賣を爲す者にし

て辨舌軽く何やらん効能を述べ立つれば男女老弱、周囲を回りて立見
 に道の塞がるは物見高ある下民の人情、何國も同トと知られたり此時
 奇學者先生は町の模様あどを説明し此一町内の建物、は總べて某侯爵
 の持物にして貧乏人に貸付くるが爲め同家の手にて建てたる者あり
 此四階五階に上りて御覽せよ其穢きこと中々言語にも盡くし難たき
 程にて余の知り居る醫學士は曾てセントトーマス病院に在りて産科
 を修めたることありしが此地の貧乏人に施療せんとして屢々此邊の四
 五階目に上りたることあり其話を聞くに貸家の二階三階目と段々天
 上に上るに隨ひ梯子段の幅は次第に狭く四階目位の處に到れば僅に體
 を通ずるに過ぎずト振り向きて其壁を見れば所謂床虱と稱する蟲
 が上下に幾隊の行列を成して少しく體が障りたらば忽ち着物に移ら
 んかと體を横にして恐縮あがら縋に六階目位の所に達し扱て其産婦

人の家に到れば凡そ八疊敷位の間、に夫婦子供六七人が住みて此家内
 に飲食の器物は唯一コップあるのみ衣服は破れて膚を現はし重り合
 ふて部屋の一隅に轉び居り中に寢臺の無きは勿論、顔を洗ふ手洗鉢も
 なく窓は暗して光線は入らず産婦人が肩のあたりに穢き編物あどを
 打掛けて室の一隅に割據する有様は蝦蟇の暗窟に身構へたるが如く
 物凄くも又哀れあり扱て産婦が安産の後醫者が手を洗はんとすれど
 も固より洗ふ道具なければ如何どもする能はず次第に經驗を積むに
 隨ひ此邊の産家を見舞ふ時は必ず白木綿を携へ行き穢れたる手を之
 れに包みて其儘歸宅する程なりしどの事なり云々と語るを聞き居士
 も此町の様子を見て家内の様子を想像し東洋にては貧乏人が地下の
 穴に棲むことあれども西洋にては空中に棲めり東洋の地獄は地底に
 在りて西洋の地獄は天上に在りと共に一笑を催したり兎角する間に

夜も更けたり扱て彼の鬼は何れに在りや羅生門に來りあがら手を空くして歸るは残念ありと足に任せて歩きたれども鬼と認むべき物に出逢はず最早終汽車の時間にも迫る可ければ共に歸路を急がんとて夫よりブロード、ストリート停車場を指して早足に行き過ぐる途中暗黒ある町の片隅に背の高さ六尺にも餘る可しと覺しき大の男が立ち居たるに佛蘭西紳士は例の氣輕の性質とて停車場へはドノ道より參るべきやと問ひたるに男は至て僣しき聲にて左れば此道より其路に行き左に折れ右に曲がれなと懇に教えあがら我々の方に進み來りて行く手の真中に立塞がりサ、道の教は代を頂戴せんと十能の如き大なる黒き手の掌を我々の前に突き出したり此時の聲は前の聲とは打て違ふて荒々しく又鈍くして訛を帯びギョーパミョッパ（銅を呉る）と云ひッ、詰め寄たり佛蘭西紳士はギョッとして二足三足退きたれ

ば奇學者先生イザ曲者御參かれと持ちたる杖に力を入れ先生の甥なる若紳士も鐵の棒を横手にして寄らば撃たんと身構へたる様子居士は此様子を見てア、吾あがら失敗たり危邦には入らずと云ふ諺もあるに斯かる場所に入り込みたるこそ不覺かれ高の知れたる些少の金、與へて安々と通らんものどポケットに手を入れて一シルリングの銀貨を引出し今や渡さんとする其手を押へて奇學者先生は渡させず往來の人に道を聞くは人間お互ひの事にして之れが爲めに教貨を拂ふの理由なしとて路の片隅より通り過さんとすれば大の男は遮ぎりて其通行を爲すを許さず如何はせんと思ひたる所に幸なる哉後の方より商人體の人が七八人ばかり組を成して何やら高聲に語りあがら問近く此方に來りたれば大の男も少しく氣落ちし此方は得たりと勇氣を張り一組の人の近く付を待て共に此圍みを衝き破り足早に十四五

間も行過ぎたる迄は大の男も茫然として迹見送りて立ちたりしが何に思ひけん足早に又も追掛け來らんとするにぞスハ一大事と我々一行、飛ぶが如くに逃げ延びてブロード、ストリート停車場の屋根を遙に認めたるときは虎口を脱したる心地してホッと一息突きたりける

鬼狂言

倫敦東部に鬼物語を生トたる其當時、同府の新富座とも稱すべきライセラム座此座主は有名あるヘンリー、アーヴン氏にして當座にてはシエークスピアの時代物等を興行すること多しに Doctor Jekyll and Mr. Hyde と稱する外題が現はれ偶然にも府中の大評判を得るに至れり抑も此外題はロバート、ルイス、スチヴンソンの小説より出たるものにして此狂言の主人役を勤めたるは米國若手の俳優中にて一種の奇骨を具へたりと云ふチャールズ、マンズワフ、キルードなり小説の原本は一

箇想像の奇説を示すを以て主眼としたれば一人の婦女をも交へざれども芝居にては五幕に仕組んで多少の色氣を加へたり今其大意を摘んで申せば茲にドクトルゼキルとて慈仁温厚の醫學者あり家富みて何不足なき身分あれを好んで醫學上の研究に従事したりしが其友人ドクトルランヨンある者と一日談話中に議論を生トて凡そ人間の性質には善と惡との二あれども今藥劑の力にて此善惡を分析し其一を遊離せしむるを得るや如何と互ひに講究を凝らしたる末ゼキルは斯る藥を發見するの望みあき非ずと主張して止みしが其頃よりして倫敦府中に不思議ある怪物を出現したり此怪物は名をエドワルドハイドと呼び體は至て小さくして其顔色の瘳猛あること殆んど名狀すべからず怒るが如く怨むが如く又事に激したるが如く忽然として現はれ忽然として隠れ往々近寄る者に喰ひ付き子供を殺し婦人を傷け

國會議員サーメンハルスカリユーを殺したるも亦此怪鬼なりとの評判ありければ之を探偵すること嚴重なれども怪鬼は小暗き裏町に一軒の明家を住居として之れに年老いたる下女を置き平常堅く戸を閉して下女さへ其起居を詳にせず出沒變幻迅速にして影を見ること能はざりしが一夜雨風烈しきにドクトルランヨンの門を叩くものあり何人ならんと坐に延けば瘳猛恐るべき怪鬼あるにぞ驚て其來意を問ふに是れはエドワルドハイドとてドクトルセキルの體內に合ひ悪性質の塊ありと持參の藥を取出してグツと一口飲むや否や今迄鬼ありしエドワルドハイドは忽ち慈仁温厚あるヘンリーセキルと變じたり是に於てランヨンはセキルが善惡分析藥を發見して親から惡性の怪鬼と爲りたるを悟り且つ感ト且つ驚くと云ふ此處が芝居にて喝采を得る處あり斯くてセキルが藥を以て體中の善分子と分離せしめ惡一

方の人と爲るときは善の分量丈け減ずるを以て其體も亦小さくあり満身猛瘳疾惡の原素のみと爲るが故に人を殺すと度々あれども此善惡變化の際に記憶力だけは現存して善人のセキルと返りても惡鬼と爲りて爲したる惡を分明に記憶するが故に憂心忡々として日を渡り最後探偵方に迫られ一片の遺言書に身を善惡分析藥の試験物と爲したる顛末を認め毒藥を飲んで自殺すると云ふ仕組にして芝居の方にては此セキルが惡鬼となりて殺したる彼の國會議員カリユー氏の娘は即ちセキルの情人にして此情人の親を殺したるを以て一層後悔の念を強くし情夫情婦の間に於て悲喜轉變情緒纏綿の趣を示す等の面白味もあり一種想像的の芝居にして舞臺上にては此ドクトルセキルがミストルハイドに變化する其早變の妙あるとギヤールスマンスフ# ールド氏が米國俳優中に於て其名と得たる處にして脊の低く瘳猛

ある鬼がランヨン國手の家に來りて本身たるドクトルセキルに立選へる時は其瘳猛ある顔に手をだに觸れず唯コツプの水を呑み屈みたる腰を立直す間に奇なる哉妙なる哉此瘳猛なる鬼は慈善温厚なるドクトルセキルと變ずるはソモ是れ如何ある奇術にや見物人も殆んど之を知ると能はず此變化不思議に就ては曾て亞米利加の新聞記者がチャールスマンスフキールド氏を訪ひ君の舞臺中にて早變りを爲すは如何なる術ありて然るや瘳猛ある鬼の顔に毫も其手を觸れずして忽ち温厚慈仁の人と爲るは如何と問ひたるにマンスフキールド氏は之れに答て是れには別に術あるに非ず唯余の顔は其儘鬼となるを得るあり若し之れに御不審あらば余は足下の面前にて試に鬼と爲るべしとて俄に顔色を變へたるに一個の鬼人宛然その前に現はれたるに予新聞記者も舌を捲て驚きたる事ありと云ふチャールスマンスフキールド

日が斯かる不思議ある鬼の姿をライセアム座の舞臺中に現はしたる時は恰も倫敦東部に於て怪鬼の人を殺したる時ければ是れこそドクトルセキルの如き者が善性分離の藥を飲みて忽ち瘳猛ある鬼とあり人を殺して家に歸れば忽ち又驅鬼劑を飲みて元の慈善温厚なる人間と爲るが故に巡査の探偵嚴重なるも縛に就かざるものあるべしと一時婦女子の評判と爲り當時非常の喝采を得たりしは是れ亦不思議の奇遇ありと云ふべしマンスフキールド氏は年頃三十五六にてもあらんか藝に一種の奇骨ありて殊に一癖ある人物を扮するに長じ例へばプリンスカールと題する狂言にて巧に斜視眼ある日耳曼プリンスの態度を示し又シェーシスピアの作に係るリチャード三世と稱する狂言にて陰險残酷あるリチャード王の性質を寫す等後來恐るべき大俳優と爲るべしとて評判殊に高きが如し左るにても彼のドクトルセキ

ルミストルハイドと云へる一人二體の早變りは日本の芝居座に移しても随分面白き狂言とあるべく而して之を扮する者は一も二もなく菊五郎ある哉と云はざるを得ず居士は此芝居の原本たるスナヴンソンの小説をも持參せり世上好劇の人ありて之を舞臺に上せんとするの考あらば我日本の芝居社會に或は一奇觀を呈するとモあらんか居士の樂んで見んと欲する所あり

テームス河上の別荘

此處はテームス河上ワグレーブと申す一村落あり倫敦を去ると三十五英里人家は百軒足らずあれども河の右岸は概ね由緒ある倫敦人の別荘にして最と風雅なる住家も多きが中にパーリモアハウスと云ん名くる住居は門の兩側に煉瓦の高塀を繞し門内に入れば臺所の正面に廣き芝生のテニス場を設け其周圍には今を盛りと咲出でたる薔

薇又はチユーリップあぞ云へる最と美事ある花卉を植ゑ付け來訪の人は太田道灌氣取りで此花道をクルリと廻はりて臺所の入口に達し扱て主人の案内を乞ふて徐ろに其家内に入れば臺所口より熱帶地方の動物の皮又は其頭顱等を飾り附け客室の入口には野蠻人の手槍或は箭鏃あぞを兩側に列して嚴めしくもあり又古雅の趣もあり夫より客室に通ればお定まりのピアノ一臺ストーブの上棚には金銀寶石等珍らしき置物も見受けらる此室に引き續きて左側に開きたる一室は是れぞ主人の書齋にして滿室皆書ありと申すばかり古典法律經濟小説等も少あがらず然して其室の正面に恭しくオースチン氏の法律全書とダーウキン氏の著書を飾りたるを見れば主人學問の原因する所を知る可く又此二氏の説を突き雜せて今の英國の社會を論じたらば其結論は自由保守急進何れの處に歸着す可きや是れは讀者の想像

に任せ置きて扱て又其次ぎの本箱に同一表装の小説本數十冊を飾りたるが是れは此家の細君の母氏が著述したる者の由、其著書は五十餘種ありて蠅頭の細字三百ページ以上の物あれば其大著述たる申す迄もなし書齋を出で、庭面に出づれば高さ二尺ばかりの薔薇垣あり垣に接して二脚のテーブルと藤椅子あるは此家の夫婦が倫敦雜誌への寄書を認め或は午餐後の茶を喫する趣向ありと思はる垣より以外は青々としたる芝生にてマラ／＼下りに二十間ばかり下りたる處は即ちテームス河の右岸なり加賀の千代が何んどか詠トさう大柳の蔭に奥深き小船渠を設け此内にパンタ(棹にて船なり)一隻ボート一艘カヌー(一本カヒにて船ぐウツロ船あり)一艘を繋ぎたり河の對岸一帶は望みも盡きぬ牧場にして青草の中にバタカップの黄花を點トたるは青氈に黄金を散トたるが如く斯くて此の牧場のアチヲコナヲに

黄牛の轡を伴ふて行き又は眠るあそびの景色あるは名工の山水畫めきて面白く又河の上手に向ひ垂柳陰々たる其上に黒き一橋を架したるは是れぞ倫敦の遊客が下流ヘンレーに來往する瀝車道にして平遠閑澹の景中に朝夕汽車の黒烟を搖曳するは日本支那の山水畫には未だ見當らぬ風致ありかし斯かる處に河上より一艘のボートを漕ぎ來るものありボート支度で身輕るの出立三十五六の凛々しき紳士は兩手にカヒを動かし居り舵取り役は細君あるべし片手に何にやら雜誌を持ちて舵取りながら讀み居る様子船首に坐して笑を含み時々河上の方を望みて赤地のハンケチーフを動かし居るは年頃十九か二十の婦人水色に白線の入りたる服を着けボート用の赤帽子を冠りて金色の髪は額にカ、リ英國の女子には珍らしき愛嬌顔あれども眼元の何となく紳士に似たるは迷ふ方なく妹御ならん謂あるか此若婦人が頗

りにハンケチーフを動かすは河上より来る一艘のカヌー正に此ボートに追ひ付かんと勢込んで漕ぎ寄すれ程隔りて力及ばず頻りに煩悶する爲めなるべし程なくボートは件の別荘の船渠に漕ぎ着け男女三人手を拍て一時に凱歌を奏したればカヌーに乗りたる淮亭居士は最早望を失ふてカヒを船首に投げ出たし流に任せて悠々と別荘近く来りたる頃主人の妹待ち受けて淮亭様さぞお疲れて御座りませうが只今アイリー子號より手紙が参り今夕五時の茶會には是非ともあかたを御同伴と申す事御苦勞ながら其儘直ぐにと云ふにぞ居士はボートに移り河を下れば水又と爲る右手の流に漕ぎ入れば岸柳互に枝を交へて水はすすく緑を添へ向島の堤には櫻の花洞を見受けたれ共是れは柳の葉洞あり扱ても美事の景色かなと居士は獨り首肯きて行く間程なく一橋あり橋の彼方に一軒の茅屋あるはコハンソモ五柳先生

の御住所にやと訝かる容子を見て取る細君淮亭様、テモ風雅な住居では御座いませぬか夫れに此家の主人に附ては面白い話が御座いますエセルよ淮亭様に御話しあさいなと妹の方を見回ればエセルは片頬に笑を含み淮亭様お聞きなされ此家の主人と申しまするは倫敦にても由緒ある家筋何不足なき御身分なりしが固より一癖ある紳士おれば親御も早く好き嫁取りて悴の心を柔げんと其縁組を勧めたるに紳士は親御の命に違はず仰せ畏まりて候と一應得心は爲したれども思ふ仔細のありしにや恰も縁組の當日に竊に我家を脱け出で、此ワグレーアの地に潜み其年二十五六より色即是空と頓悟して浮世の交を思ひ切り三十幾年此家に住みて今は六十路を越えたれども絶ねて他人に交はらず御覽の如く淋しき住居何んど嫌か人では御座いませぬかと言ひ差して居士の返答を待つ者の如し扱て外國に來りて其國

人より右の如き御座いませぬか」の問を掛けらるゝ程困却するものは
 ちし流石に「然り」ども申されず此際の窮策は極軽く「ノー」と答ふるの外
 なければ居士は形の如くに返答す、細君はエセルに向ひ「エセルには私
 がこの御主人のやうお婿さんをお世話致しませう」と云へばエセ
 ルは船を漕ぎ居る兄の方を顧みて「兄さんも早く逃げてお仕舞あさう」
 と云ふ此シツペイ返しに細君は閉口する、エセルは船端に倚り掛りて
 笑ふ漕手の主人公は船が片寄る迎小言を云ふ、此間に船が葉洞を通り
 過ぎて忽ち廣き流に出てたるは柳々州の所謂舟行若窮、忽又無際之趣
 ありし、是より下ると六七町、河幅の次第に狭まりたる處に堅固ある水
 門あり、水門に近寄るに隨て一同ロツク／＼と呼ばれば門番出で來り
 て水門を開く之を合圖に船はスーと水門を過ぐるとあり、抑も此ヲ一
 ムス河中に處々右様の水門を設け置くは水量割合に少あくして之を

自然に任するときは河上砂を露はして船を通すると能はず扱てこそ
 處々に水門を設けて河水を保存するものありと云へり、水門を下ると
 三四町、牧場左岸に打ち開き右は老樹の森にして樹間往々人家を認め
 得も言はれぬ好風景と見れば左岸に五六株の老柳ありて其下に一艘
 の樓船を繋ぎ樓上に掲げたる白旗には赤く「Hone」と染め抜きたり、此時
 エセルは居士に向ひ「アイリーチとは羅甸名にて獨逸の或るお姫様に
 も同ト名が御座います、が何んと可愛らしい名では御座いませぬか、ッ
 ラ／＼彼處に團泥が出て参りました、アノ犬は誠に利口で御座いまし
 て船が通る度に必ず吠て合圖を致すさうですよ」と言ふ間に船はアイ
 リーチ號の傍に着き、團泥先生は取次に換はり一人毎に尾を振りて夫
 れ／＼挨拶を爲したれども最後に居士が上るを見て「此奴顔色の異は
 つた男この團泥は其方に挨拶する筈では、あいが今日は客人とあれば

是非もあし颯々と通り召されど人あら言ひさうを素振りにて尾をビク／＼と動かしたばかり此間にアイリー子號の主人夫婦門口に出迎へて寒暖の挨拶居士は徐に此船を見るに長さ八間幅二間長方形の長持の如く周囲に細き廻廊あり段階子にて二階に上れば椅子テーブルを備へ置きて讀書喫茶圍碁等に適せしめ又此船より棧橋を掛けて往來するの便利もあり門口を入りたる處に杖立帽子掛等の飾り純子の幕を左右に開けば一方にピアノ、ヴァイオリン等の樂器を置き一方には日本の兜を始め古器物並に山水畫の額等を飾る即ちツロウヰングループもあり其次ぎが食堂にて恰も茶の用意が整ひたればイヤ是れへと案内に連れて一同堂内に進み入るにテーブルの上には草花の裝飾最と美事に主客坐定まりて茶を飲みながら席上の客を見れば居士一行の外に老若婦人客四五人あり中にモ年頃三十前後のアイリー子婦

人は何か喋々と饒舌り立て一言毎に自身の父母又は其夫の言を引き花の談が出来ればアノ宿では此花を好みます母の着物には此花の形が御座いますと独り口敷をコナしたれどもエセルが過日倫敦に行きてミカド芝居を見たる評論聲朗に話すに及んでアイリー子婦人は忽ち談話の中心を奪はれ頻りに不興の容子われども居士も去る者其機に乗つてエセルの評論に調子を合せ談話の全權を分捕りて之をエセルの手に渡したるは往時ヒーコンスフヒールド卿が女皇を扶けて歐洲外交の中心と英國の手に集めたるど一般居士の得意大方ならずと見受けたり斯くて喫茶も了りたれば船の主人の父君はエセルの兄と二階に上りて既に將碁盤に向ひたる容子夫人は年頃卅三四當年十ニ歳の愛嬢が能くマーチを引くのが御自慢エセル共々愛嬢を音樂室に連れ行きて婦人客は舞蹈を始め居士も其場に行かんとせしが舞

船の室は狭くして婦人の臂は至て大かり低き鼻先を磨りムカるゝも
 妙ならずと夫より主人の案内を乞ふて次ぎの一間に進み入るに此處
 其夫婦の寢室にて寢室はソハ兼帯の輕便物狭き處には尤も妙あり此
 室の繪畫は總て歴史畫にして名品も少ならず山水の中に住むものは
 斯かる畫を眺むる方が目先き換りて却て妙なるやう思はれたり其次
 ぎが庖厨にして風呂場を除くの外何に一つ備はらざるものなく扱も
 愉快なる住居か左るにて此船を作るには何程位の費用を要する
 ものにやと問へば主人は之れに答へて此河筋には此種の船を所持す
 る者幾人と云ふとを知らず其造作費も種々なれども大抵三百磅より
 五百磅の間にして此船は三百八十磅と覺わたり之れに船内の裝飾品
 を加ふれば中々莫大の費用あれども船の首に綱を附けて此處彼處と
 住所を移しテームス河岸の景色を代りくく眺むるも亦此生の一興

考りかし左ればこそ此種の船を House-Boat と名くるあれ日本にてモ斯
 かる種類の船や候かと問はれて居士は口籠りて如何にも猪牙船と
 申す者御座候と答へて愛國心を現はしたり兎角する間に時移れりイ
 ザ御暇乞仕らんと一同立てば主人夫婦は幸ひ是より老父を送り河の
 晩景を眺めながらシツプレッシへ参る積り左様あらばと立上り繋げ
 るボートに打ち乗りて或は下流に下るもあり或は別を告ぐるもあり
 例の團泥も舷頭に出て、左様あらばと尾を振りたり

俱樂部

英國には俱樂部多くして佛國には甚だ少し是れ佛國にはカッフエ
 ーと稱する酒茶屋兼談話所ありて社交上の用を爲し俱樂部を利用す
 るやうの人は概ね此カッフエーに出入するが故ならん然るに英國に
 はカッフエー少く俱樂部を以て社交上の最も必要なる機關となせ

り居士曾て其大要を録したるものあれば之を左に掲ぐ
 シヤニオル、コンヌチエーショナル俱樂部 是れは保守黨の俱樂部
 あり會長は現總理大臣ソールスベリー侯にして會員は凡そ五千八倫
 敦南西部リセント街に在り四層の堅固美麗なる大建築にして戸口を
 入りたる處に受附あり燕尾服の小僧は此近傍に陣取て來客の名を會
 員に通ずる等の役を勤む、受附口に對したる片隅には倫敦府中並に各
 地より政治上に關する電報を受取る機關を据ゑ附け機關がカチ／＼
 と働きて「ジョン、ブライト氏は何時何分に死去したり」「バアミングハム
 撰舉區の候補者は何々氏あり」議院にては只今蘇格蘭地方自治案を提
 出したりなど云へる種々の文字が細き紙片上に現はるれば順序を逐
 ふて之を壁上に張り附け以て會員の便覽に供し又その近傍の壁上に
 彼のエキスチエーンザ、テレグラフヒツク會社より毎三十分間に配達す

る國會議院の傍聴筆記を貼し置けり受附口より左に入れば一時に數
 百人を響應す可き廣大なる食堂あり右に入ればクロックルームとて
 來客が帽子外套等を脱ぎ置く所あり此より進んで奥に入れば數十人
 にて着席す可き食堂並に四五人にて私に食事する小室數箇所あり是
 より一段階子を下りたる處は總て俱樂部の給侍小使等の室にして來
 客は入るを好まず俱樂部最下層の間取りは先づコンナ物にして夫れ
 より元の受附口に戻り廣き階段子を踏んで二階に上る其中段には家
 相應に大なる油繪の扁額數個を飾り階子盡きて左に開きリセント街
 を俯瞰する一大室は即ち俱樂部の書籍館にして政治經濟統計等の書
 冊を備へ又内外各種の新聞雜誌を幾脚のテーブル上に並べ置き以て
 會員の縦覽に供し室の片隅の卓子には俱樂部用の手紙狀袋等を整頓
 して會員隨時の用に供し居所の定まらざる人或は屢々移轉する人は

俱樂部より手紙を出し又俱樂部にて之を受取るの便利あることなり
 書籍館の右手ある廣大なる一室は是れが俱樂部の本部とも云ふ可き
 場所にして處々に圓形の卓子を置き其周圍に幾個とさく手摺り付き
 の椅子を環らして會員が茶を喫し酒を飲み烟草を吸ひながら團談
 笑するの便に供し其正面の書棚には數十年間に亘る倫敦タイムズ新
 聞のトザ込みを安置し室内の裝飾は總て壯嚴の趣を存せり此室の右
 壁に隣りたるは即ち俱樂部の玉突場にして縦へ日曜日なりとモカナ
 リくを禁せざるは俱樂部の俱樂部たる所以なる可し玉突場と廊下
 を隔てゝ相對する一室は是れなん加留多の戰場あり四角形の卓子幾
 脚に各々四個の椅子を繞らし「キングと參らう」然らば此方はボイント
 で切らう」親が二十一なら子は五枚引きと出掛けませうなと云へる聲
 が常に室内に反響するを聞くのみ但し會員以外の人はいさ室に立入り

で義勇兵の働きを爲すこと能はざる由あり斯くて俱樂部の會員は午
 後二時頃より友人を伴ひソロソロに來會することにして夜の九時
 十時頃は最も來客繁昌の時刻思ひくに遊興し又は新に知己を得或
 は舊相識と胸襟を披きて新舊交を温むるの外に政治上有益の談を聞
 き又新政事の速報に接し俱樂部中にて飲食すれば價は他の半額にし
 て品類は至て上等あり五千の會員交るゝ此に會して相樂むは決して
 偶然あらざるなり

ボヘミアン俱樂部 是れは一風變はりたる俱樂部あり創立は極近來
 の事にして今の會長はジョン・プロクトル氏なり去る頃の倫敦狂畫雜
 誌にパートル氏が或る理髮店に到り身装を飾りて清潔ある紳士たら
 んとする所にラブリーシエヤ氏が後より髪を撫で附けグラットストン
 氏が前に廻はりて靴の紐を結びジョン・プロクトル氏が毛箒木にて外

套を拂ひ居るの状を寫し置きたるを見てモプロントル氏が英國社會
 に如何なる位地を占むるやを知る可し之れに屬する會員は凡そ四百
 人ばかりにして其昔し倫敦の演劇舞臺にて幕の内に入りたるオデル
 氏の如きあり五十年來土木建築に大功あるハリー氏の如きあり喬
 師寫眞師醫者軍人或は倫敦通の又通粹の又粹ア、でもちい斯うでも
 ない、日本にて申せば「オホンさうでげせう」と云へる句調の大先生も多
 くして多くは一技一能に勝れ種々の遊藝に長トたる人々なり俱樂部
 は倫敦の銀座とも申す可きオックスフォード街七十二番地にありて館
 内の裝飾も流石に武骨殺風景ならず佛蘭西渡りの金地の壁紙に赤地
 の絨段は目移りよく赤縁の革椅子は長坐の客に痲痺を生せず電氣燈
 のホヤに薄赤地の紙蝴蝶を點トたるは眼の弱き人に迷惑を來さず玉
 臺食堂カルラの部屋は大同小異二度言ふは無用ありとして扱て二階

の大會堂は日々會員の談笑娛樂する所にして毎二週間に一度つゝ喫
 煙音樂會を催はすが例なり何れの音樂會にてモ婦人と申す邪魔物の
 出現し居る處には總て喫煙を許さざるが或る西洋國の習にして烟草
 好きの人々は小兒の乳に離れたるが如く之れに堪ふる能はざるもの
 は例の喫煙烟草を用ふるものさへあり男子の毎度閉口する所なれど
 も俱樂部と申す一社會は一種治外法權の場所にして邪魔物の權力も
 此に及ばず倫敦中の俱樂部の數は幾多あるを知らざれども婦人の常
 に出入するは僅々二三箇所のみありと云へば邪推深き盤若連が俱樂
 部を見ると恰も虛無黨の巢窟の如く良人俱樂部に御出馬と聞きて窺
 に娥眉を蹙むるは一應尤もなるが如し閑話は此邊で休憩して扱て此
 喫煙音樂會にては會員銘々得意の藝を演ずる事にてピアノヅワイオ
 リン、ホルン、笛或は唱歌或は新工風の滑稽談等素人藝とは思はれず中

には何々座に出て、一夕幾十磅得るやうの名手もあり一曲終る毎に拍手喝采する其中にも一夕最も評判を得たるは會長フロクトル氏の手藝あり氏は空手にて高座に上り是より手球立物等の曲藝を演す可しとして手球を高く投げ上げて額で之を受ける眞似やら長さ竿上に茶碗を載せて之を額の上に立てる身振りやら眞に迫りて得も言はれぬ妙味ありし又一夕會員中酒に酔ふて高聲を上げ他の音樂を妨けたる人ありしにルーマニヤ人パレオログ氏と云へる畫師は傍より其容態を眺めあから鉛筆を走らして瞬く間に之を寫せり然るに其筆の巧ある下手も寫眞師が寫眞を取るよりも尙速く満座之を廻視して其技倆に驚かざるものありし其後一日余は氏をボヘミアン俱樂部に見たれば前夜の手にて感心したる旨を述べたるに氏は余を手摺椅子に倚らせ凡そ十分ばかりの間に何處から見ても准亭居士に間違ひなき肖像

像を寫し取り自分の名を署して之を居士に贈りたり其夜歸りて家人に示すに當國にて肖像の下畫を名手に頼めば少くも十磅位の潤筆料を要する由貴重品の品あれば珍藏然る可しと云へり之を要するに此俱樂部は一口に通人粹客の集會にして俱樂部中一種出色の者と申して可あらん

瑞西俱樂部 倫敦五百萬の人口中其幾分を占むる者は外國人なり此等の外國人は大抵同國懇親會と申す體裁の俱樂部を有せざる者も懇親會と云へば固より男女を區別する筈なく老若兩性相會して異郷に暫時の故郷を作るが右外國人俱樂部の目的ありと知る可し余は或る日曜日の夕刻瑞西人と同伴して同國人の俱樂部に赴きたるとありしが最初の申込みが今夜は我が俱樂部に音樂會あれば御同道致す可しとの事に余は先づ一驚と喫したり勿論日本に在りたる時は日曜日

には何々座に出て、一夕幾十磅得るやうの名手もあり一曲終る毎に拍手喝采する其中にも一夕最も評判を得たるは會長フロントル氏の手藝あり氏は空手にて高座に上り是より手球立物等の曲藝を演す可しとして手球を高く投げ上げて額で之を受ける眞似やら長さ竿上に茶碗を載せて之を額の上に立てる身振りやら眞に迫りて得も言はれぬ妙味ありし又一夕會員中酒に酔ふて高聲を上げ他の音楽を妨げたる人ありしにルーマニヤ人パレオローグ氏と云へる畫師は傍より其容態を眺めあから鉛筆を走らして瞬く間に之を寫せり然るに其筆の巧ある下手も寫眞師が寫眞を取るよりも尙速く満座之を廻視して其技倆に驚かざるものあり其後一日余は氏をボヘミアン俱樂部に見たれば前夜の手にて感心したる旨を述べたるに氏は余を手摺椅子に倚らせ凡そ十分ばかりの間に何處から見ても淮亭居士に間違ひなき肖像

像を寫し取り自分の名を署して之を居士に贈りたり其夜歸りて家人に示すに當國にて肖像の下畫を名手に頼めば少くも十磅位の潤筆料を要する由貴重品の品あれば珍藏然る可しと云へり之を要するに此俱樂部は一口に通人粹客の集會にして俱樂部中一種出色の者と申して可からん

瑞西俱樂部 倫敦五百萬の人口中其幾分を占むる者は外國人なり此等の外國人は大抵同國懇親會と申す體裁の俱樂部を有せざる者多く懇親會と云へは固より男女を區別する筈なく老若兩性相會して異郷に暫時の故郷を作るが右外國人俱樂部の目的ありと知る可し余は或る日曜日の夕刻瑞西人と同伴して同國人の俱樂部に赴きたるとありしが最初の申込みが今夜は我が俱樂部に音樂會あれば御同道致す可しとの事に余は先づ一驚と喫したり勿論日本に在りたる時は日曜日

こそ一週七日中最も賑かなる日柄なれば日曜日とて他日と區別することなければも英米兩國の如く休息日の習慣嚴重なる國柄に居ること久しければ唯何の理由もなく日曜日は上下でも着けたる様の心地して自から改まるの癖を生ト日曜日に音樂會杯と聞けば先づ一驚を喫するやうに爲るものなり扱て夜の八時頃同會に至るに館の下層に廣大なる會堂あり二階三階は總て玉臺加留多場等の所とす會堂中の正面にピアノ其他の樂器を置き幅廣き長卓を三列に並べ會衆之れを環りて坐するの趣向にて卓子の上には瑞西名産の葡萄酒瓶が片端より並び居れり會員は上下打ち雑せ不揃ひにして同席を好まざるやうの人物もある其中には立派なる銀行者等も雜り居り唱歌音樂は孰れも自稱好音先生婦人もあれば男子もあり其巧拙は評するに足らざれども一見甚だ不思議なるは唱歌音樂人々其國語を異にして伊太利佛

蘭西日耳曼英吉利各々得意の歌を唱ふるとあり今其次第を瑞西人に問ふに同國は伊埃佛獨の四國に隣して四國人との往來交通頗る頻繁あるが故に便利上一人にして四國語を談せざる可らざるの都合にて普通談は變調の日耳曼語を用ゆれども其間に各國語を交へ學校の教育上にも其國語を一種に限らず此處に臨席したる瑞西人は何れの國の歌にても之を聞いて興に入らざるとなすと云へり斯くて一音曲を終る毎に一同拍手喝采して卓上の酒を鯨飲しながら大聲開笑する其有様實に一種の奇社會あり因て又傍の瑞西人に問ふに本國の日曜日も矢張り此通りなりやどの問題を以てすれば之れに答へて左ればあり瑞西國には耶蘇新教が勢力を得て此等の議論は八釜しき事なれども人間の愉快國人の好む所は強ゆ可らず或る商店などは固より戸を閉せども家内は先づコンナ物なり又政府の方にては此等の規則を嚴に

するの力あしと申すは他に非ず今瑞西の大統領は一年交代の制にして其權力甚だ弱く短き就職の其間に敢て國人の急所に觸れて其入望を失ふも妙あらず特に今年の大統領は大きな酒屋の主人なれば日曜日の置酒高會に因りて自家のポケットに影響を及ぼすこと少あからず兎に角我瑞西人は喪服を着けたる時の如く沈黙愁傷の色を以て日曜日を送る彼のコ、十英國人を學んで我々の壽命を縮むること能はざるなり云々として戯言半分の物語を爲せり蓋し此等は居士の目撃したる俱樂部中にて最も品等の下りたる者あるが如し

新聞俱樂部 倫敦中央東部フリート街に新聞俱樂部と稱するものあり身新聞記者たらざる者は固より此俱樂部に加盟する能はざれども目下會員三百二十名ありと云へり讀者試に思へ新聞記者のみにして三百二十名と云ふ數は實に異常の者ならずや居士が東京に在る頃に

月に一回位づ、新聞記者の集會を催はすとありしが大小新聞一社より凡る一二名づゝを出して會する者は僅に十五六人若くは二十人に過ぎざりき倫敦廣しと雖も新聞記者多しと雖も倫敦新聞記者のみにて斯かる大數を集むること固より六かしき事なれども倫敦は新聞材料の寶山あるが故に英國各地方は勿論米國若くは大陸諸國より常置通信員を派出し置きて新聞種の發掘に従事せしむる事にして此等の通信員が相合して斯かる多人數の俱樂部を爲すとなり因て思ふに日本にても國會開設の其後は各地方新聞社に於て勢うの特別通信員を東京に常置せざる可らざるとならんあれば東京滞在の新聞記者は遑て大に其數を増すある可く隨て新聞俱樂部設置の必要を感ずるともある可きあり扱て此フリート街と申すは倫敦各新聞社の巢窟にしてスタンダード、デイリー、ニュース、デイリー、テレグラフ、デイリー、クロ

ニッル等の大新聞社を始め繪入小新聞雜誌社等孰れも此近傍に群集し居れり俱樂部は恰も此中央に在るが故に會員餘暇を得る毎に此に來りて食事を爲し喫烟喫茶玉突加留多思ひくくの樂に其銳氣を養ふことあり俱樂部會館の間取り等はクマクしければ之を省き此に會する人々の中一見品格の高からざる者もあり眼のキョロクしたる處大言放談頭を抱て失笑する處を新聞記者と申す者はコンナ物かと思ふ程あり併し此等の人々は多くは各地方新聞社の探訪者等にして何々新聞の編輯長若くは次長を云へる者は流石に落ち着きて人品宜しく共に談トて益を得るのみならず唯此俱樂部を見るに付けて最も驚きたる者は各新聞記者の舉動是なり世に言行不一致を以て罪を社會に得るものあらば英國の新聞記者は閻魔王の照魔鏡に對するを待たず現世に在りて已に拔舌の刑に處せらる可き者あり宗教新聞

記者至て宗教嫌ひの人間ありなぞ云ふとは暫く問はず保守黨の機關新聞社に居て日々自由黨を攻撃し又之を嘲弄し時としては筆端火を放つて戦争する其記者先生の私の持論を問へば豈に圓らんや日々攻撃する其敵軍と同案なりかぞ云ふと少あからず今朝の新聞紙を讀み合はすれば不俱戴天の讎敵かと思はるゝ其新聞記者諸氏が午後より此俱樂部に會すれば肩を推して相戯れ一瓶のブランデーを分ちて飲み同テーブルに加留多を圓はして樂む等刎頸莫逆の親友に異ならず事の餘りに意外なるに之を或る老功者に質せば英國と佛國とは新聞記者の位地身分に非常ある相違あり佛國の新聞記者は即身政事家にして紙上の議論は自身が其責任を負ふて之を國會議院に論ト之を公開演場に説くと恰も同性質の者なれば反對論の筆者と筆者は社會何れの處にてモ相容るゝと能はされども英國の新聞記者は多くは其

社主に雇はれて執筆する者にして其身固より政事家に非ず紙上の議論は必ずしも自己の持説に非ずして何新聞は何黨の機關なるが爲め唯其黨の人氣に合ふやうに書き立つるのみ一言以て之を蔽へる英國の新聞記者は社主の假聲色遣なりと申して可あらん左ればにや反對黨の間柄にて平生の交際は斯くも親しきとなり云々と云へり勿論英國の人には一種不思議の性質ありて社會交際上常に公私を區別して之を混同すると少なきが爲め反對黨派の政事家が私交に於て至て親密なりと云へる美德ある様子あれども然ればとて英國の新聞記者が即身政事家あらんには其平生の私交の斯くまで睦ましからんと思ひも寄らず居士は英佛兩國新聞社會組織の優劣如何を言ふとを好まず唯倫敦新聞記者が私交の甚だ妙なるを見て茲に之を記すると然り

樂部の組織 凡そ俱樂部を組織するには種々様々の方法あれども先づ普通の者に就て申せば政治上に社會上に重も立ちたる人々が申合俱何のて目的にて今度俱樂部を發起す可しと決すれば其目的方法等づ記したる委細の意見書を印刷し之を同志者中に配附して其賛成をせ乞ふと同時に其創業費金の募集に應ずるとを乞ふ可し斯かる種類をの募集株は英語にて *Debuture* と申し一株若干磅の株券あり此株券を賣り出して兼ねて所望の創業費金を得れば之を以て會館を借り入れ室内の飾り附け諸道具より玉壺其他飲食諸器具に至るまで一切之を整頓して世上同好者の入會を待つことなり扱て入會者に向て入會金を取るものあり取らざるものあり俱樂部創立の際例へば會員を一千人と限り其五百人までは入會料を取らず夫より後れて申込む者には三ギニーなり四ギニーなりの入會料を課するなどの仕向もあり斯くて

會員銘々の會費は在京會員年に三ギネーより四ギネー、地方會員年に二ギネーより一ギネー半が通例あり、今一ギネーは日本の凡そ六圓に相當すれば三ギネーは十八圓、年に十八圓を投れずば場所柄も便利に椅子其他諸器具も立派ある大會館に入入して多くの會友と交際談話し或は時に音樂會を開き或は會員私の招待を受け電氣瓦斯燈を十分に使用して各國各種の新聞書籍等を読み政治上社會上の新事件を時々刻々傳聞して朝の八時頃より翌朝の二時三時頃まで勝手に談笑するを得る何んと便利ある者あらずや尙此上にも俱樂部にては食膳肉類總て問屋より仕入れるが故に旅宿の食事定價に比すれば其價殆んど半減あり玉壺に向て玉を突けば五十、一ゲームにて僅に十二錢内外にして他の五十錢なるに比すれば其四分の一にも當らず其他茶を喫し酒を飲むも萬端行届きて上等あるに加へて價の廉からざる者

あし即ち英國にて紳士の俱樂部に遊ぶを好むは決して偶然あらざるあり
曾て日本と英國との生計を比較するに食住其他の諸費用は英國の一週間と日本の一箇月と正しく相當するもの、如し此比例上より申せば日本の俱樂部風の會館にては會費が少く便利愉快が多くして可ある筈あれども今の日本の俱樂部掛りたる處にては月に一圓年に十二圓位の會費を要し然かも不便利勝あるに加へて俱樂部自身の會計は常に不足勝なるが如し英國にては三百か四百の會員にて中央部最も便利なる處に立派なる會館を維持するに引き替へ日本の會館の割合に不便利不愉快にして割合に會費の高直なるは何ぞや居士は之を其會計管理の粗忽あるに歸せざるを得ず當國の俱樂部にては俱樂部の事務會計を管理する爲め先づ幾十人の委員を置き委員は會長副會長

その他數名の委任役を撰む斯くて委任役は常に目と會計事務上に配り會館の冗費を省くやう會員の便利を與ふるやうその注意を怠らず又た館中の修復その他特別の事件に就きて委員中より更に特別委員を撰みて細に之を取調ぶる等之を日本の會館にて會計は一二の書記に任せ重役は漠然として之を顧みるとも會館に冗費あり會費に滞納あるも之を放任するなどの事情に比すれば同日の談に非ざるあり左れば今後日本にては俱樂部の組織を導くに當り重も立ちたる會員が絶えず其會計事務上に注意するの道を開くとももあらば我々は一層廉價にして西洋人が今日俱樂部にて享受する程の便利と愉快とを領するを得べきや疑を容れざるあり

俱樂部の作法 俱樂部中には種々様々の作法あれども結局便宜より來りたる者より外あらず今其一二を摘んで記せば會員は銘々二人の

朋友を同伴することを得案内役と勤むる會員は常に同伴者に氣を配り烟草は如何、コフ井ーは如何、ビーヤとホイスキーと孰れを撰ぶや云々とて其需要を欠かざる様に勉強するは固より友情に出づるとなれども又一方より申せば凡そ俱樂部の作法として朋友を案内したる會員は會館中一切の費用を引き受く可き等にして會員以外の人々は自から給仕人を呼ひ又は飲食其他の用事を命ずることを得ざるが爲め會員は其邊に氣を利かせて客に不便なからしむることを期するなり斯くて會員需用品を命すれば總て現金勘定にして會館中一切の消費は會員之を立ち去るの前に拂はざる可らず或る俱樂部にては給仕人が細長き勘定帳に一々注文品の價を書き留め之を會員の手許に持ち來れば會員は自から其紙末に記名して錢を拂へば其帳面の片隅に勘定未済と記したる處を引き破るとあり若し之を破らざれば再び勘定を促が

さるゝも之を拒むとを得ざるの法にて勘定方の間違ひを防ぐには最も妙なり俱樂部中にては會員が共同伴の朋友に向て需要の品に氣を配るは勿論、何か注文する時に近處に會友あるを見れば知ると知らざるを問はず試に其所望品を聞くが常なり凡そ西洋國人は勘定の事に精密にして特別に人を招待し特別に物を贈答するの外一毫も與へず一髪も取らず飲食店に邂逅して頼まれもせぬ友人の勘定を引き受け鐵道馬車の乗合ひに隣坐の人の札まで買ふまで申す事は先づ以て稀有のことにして相當の身分ある人々にては右等の勘定は銘々之を分擔するを例とすれども俱樂部は一種の社會にして錢の勘定必ずしも精密なるを求めず唯自他主と爲り客となりて相共に樂しむとを期するものゝ如し即ち俱樂部の俱樂部たる所以ならん

俱樂部會館中外來人の入る可らざる者は加留多室あり西洋人は加留

多を以て一種の秘樂と爲すゆゑにや館中加留多の代價は特別格外に高直にして加留多部屋に坐を占めたる會員は一人にして少なくも一シルリングを拂ふの法あり

俱樂部中にては飲食の給仕に玉突のボーイに小使甚だ多けれども平常之れに心附けを與へざるが作法にして會員の面倒を省くと大方ならず但しクリスマス祭の時はクリスマス箱とて會員出入の多き處に賽錢箱の如き者を吊し銘々の心附けを乞ふ事にして會員は此時一時に三五圓の祝儀を投げ込むの例ありと云ふ以上記する處は倫敦各俱樂部見聞の一斑たるに過ぎざれども日本にては追て政治社會の多忙あるに連れて俱樂部の開會も多きとあらんと思はるれば聊か記して夫れ等の人の參考に供すると然り

倫敦より南方海岸に近寄りてタンブリッツイェルスと云へる小都會あり此地に鑛井あるを以てウェルスと稱す市街の南に廣くして小高き一丘あり丘の中央に奇異の形を爲したる石多き中にトードロツクとて其形蝦蟇に似たる天然の大石あり子供らしき當國人の習として斯かる奇石を見物するが爲め遠方より遊覽する者多く又この丘より一里ばかりを隔て、ペルロツクと云ふものあり大石中央より二つに破れ其破れ目の薄くして廣きこと數丈に亘り身と側て、之を潜れば他の一端に達することを得べく其形我が鱒口に似たるを以て之にペルロツクと名く是れ又土地の名物として來觀者の一興を添へるものゝ如し全體の風景閑雅にして市中に來遊人多ければ旅宿并に芝居座等も土地相應に整頓して一二週間の滞在には退屈を感ずることなかる可し昨年四月居士の倫敦府に在るや家はユーストン停車場の近傍

に在りて車聲馬聲日夜枕頭に喧しく殊に地下鐵道の通行する時は家屋ビリビリと震動して其騒々しさ言はん方なく一日閑雅幽靜なる田舎に到りて新鮮の空氣を呼吸せんと之を家人に謀りたるに家内の者は異口同音タンブリッツイェルスに一遊することと勧め且つ同地に有名なるマキユリー新聞主筆ウチートルヘンリー氏にも紹介すべければ同氏を東道主人として其家の客分たる可しとの言に善は急げと旅裝を理め凡そ三時間ばかりの汽車程を経てタンブリッツイェルスなるヘンリー氏の家を訪問したり抑も當英國内に於て殊に居士等に珍しきは家内の樂み即ち是れなり第一この家内に入れば初めて相識りたる人にて一家中に引合せて共に飲食し共にストーブの前に集りて共に雑談し共に遊戯するの習にして其面白きこと言はん方なし且つ習慣とは云ひながら何事も打ち開けて腹藏なく妻は亭主と婚

姻ひなしたる時の有様より日常暮くらし向むかひの細事に至る迄、遠慮えんりょなく語り出
 て赤心を人の腹中に推して共に疑うたがはざるの趣あるは最も感心かんしんするこ
 とあり且つ多くの家内に在りて其様子を窺うかがふに夫婦物言ふつよのいひなど至て
 少すこく一家内の相談は晚餐ばんさんの時テーブルの上にて之を纏まとめ席に客あ
 りても聊いさか憚はげる所なく夫婦の間に嫉妬しよとを始め其他見苦みくるしき容態ようたいあり
 て他人に掛念けんねんするが如きことなきは即ち英國家内の特性にして能く
 外國人を容れ一夕にして故郷こきやうの想あらしむる所以ならん左れば英國
 などにては身分みぶん賤いひしからず充分一家を持ち得る人も其家族少すくければ
 ば上等の家内に客として五年六年永住いひさする者少すくからず日本にて下宿
 屋と云へば誠に鹿未しかまある者にして食事は家人と共にするに非ず少し
 く身分あるものは此下宿屋に居ることを得ず家族少すくく客を容れて
 妨さまたげなき家にてモ家内に於ける夫婦間の談話は他人に聞きかしむるこ

とを好まざるが故に自然賓客の下宿を許さゞれども英國の家内は之
 をに反し亭主は妻に對して耻はつ可たきことを爲さず妻も亭主を疑うたがふて
 物言ものいひを爲す等の事少すくく多年の習慣しよくわん何事も人の前に打ち明あけて妨
 げなきやうの趣を成せり米國は流石まさかに其風を傳へて矢張人を容るれ
 ど歐洲大陸地方にては賓客を家内に容るゝこと英米二國の如くなら
 ず扱てこそイングリシホームとて英國家内の快樂を一種特別のもの
 として之れを誇ほこることある可たけれ斯くて英國家内にては初對面しよたいめんの客
 にてモ直ちに家内の人として聊いさか隔意かたいなき程あれば居士のツンプリ
 ッタウンエルスに着するや一家擧て停車場に出向でむかへイヤ此方こなたへと案内
 されたる家は此停車場より一丁ばかりの高みにて二階の窓を推し開ひら
 けば全市の景色を一目に眺ながめトードロックも眼前に在りて其眺望てうぼう
 殊ことに妙たぎなり家は新築後間もあしと覺たばしく湯殿寢臺ゆあねだい等も新調しんてうあるは

清潔にして愉快なり主人は新聞記者なれば夜も歸宅は遅くして午後十時頃までも見えざれば先づ斷りて寢に就き一氣呵成の眠を爲して不圖眼を覺ましたる時は翌日午前の八時を過ぎたり日は最早高く上りて東に面したる窓を射り樹木に囀る鳥の聲は耳を洗ふて面白く昨日倫敦の鬱陶敷きに引かへ今日の愉快さ譬ふるに物あし枕上に在て一詩を得たり

脱却龍城十丈塵

昨來暫作一閑人

日高眠覺東窓底

臥聽禽聲繞舍新

今朝は主人に面會せんと盥嗽の後、食堂に下だれば主人は果して待受け居たり年頃五十計りにて正直質朴顔色に露はれ文墨に従事する人とも見えずお世辭もあく唯何と無く愉快の色を呈しながら先づ初對面の禮を述べ扱て此土地には種々見物するものもあり又明後日は競

馬もありチブル侯も名馬と出す筈あれば往て共に一覽せんか物語り今日は先づチブル侯の城内に到りて之を拜見すること一興あらん侯の家扶マンカン氏とは兼て別懇の間柄なれば今より紹介狀を認めん之を持參して城中に入ればマンカン氏は快く案内す可しイザとしてインキ壺引き寄せてサラクと手紙を書き了り之を居士に渡す間もあく直に新聞社に出で行きたり居士は徐に朝飯を了りて夫よりチブル城に赴かんと先づ手輕の二輪馬車を命ト此家に隣する公園を一周して更に市街の南端に出で夫より平坦ある一筋を行けど柏の並木一英里ばかり歩を進めて小高き坂を登りたる其坂の中段より左手の方を見上ぐれば遙か向ふの一塔尖に何やらん白き旗の一本高く翻へりたるは正しくチブル城の印ある可し凡そ貴族の家にては主人の城の時に限り城頭に旗を翻へし留守中は之を取去りて旗にて主人の

有無を示すを一般の慣例と爲すと云へり是より左手に十丁ばかり徐に馬車を轆らせて閑雅幽靜ある森の中を過くれば果して正門の前に出でたりツト門内に進み入るに四面に廣々たる芝生ありて處々に松杉、檜などを植付け南面一方は幾町となく芝生マラ／＼下りどあり其下り詰めたる處に一道の清き流あり流を隔て、向の山に鹿の幾匹か群り居るは即ちデイヤパーシ(鹿園)とて此土地名勝の一たる所以か夫より本館の正面に至りて其入口を仰見れば大なる立牛の像ありて兩側にコートオヴァーム即ち當家の紋所を掲げ全館蔦の葉に包りて古色益々蒼然たり右手の取次所に進みて戸口に掛けたる釣鐘をシャン／＼と打鳴せば取次來りて何御用ありと云ふにぞ先づ家扶マンカン氏に宛てたる紹介狀を出せば幸ひ在宅にして來り面せり氏は田舎染みたる人にして何事もマメヤカに語りて洩さず且つ蘇格蘭生れ

にて花木培養の術に長ト當城の花弁草木は皆ホ氏の管理する所なりとて先づ案内の手始めに一冊の名簿帳を取り出し是れ御覽せよネブル城には拙者が家扶となりてより來觀の貴人も少あからず有名ある人の來觀あれば自筆を以て此名簿帳に記名せしむるの例にして君も折角の來臨すれば先づ紀念として署名す可しと云ふ因て之を抜き見るにラッセル卿を筆始めとして次ぎに那破翁と書きたるものあり此那破翁とは第三世那破翁帝ありやと問ふに然り帝が曾て英國に流浪する頃當城に來りてチブル侯の宴に列したりしが是れは其折の自筆ありと答ふ更に次のページを見ればトールントン卿、サントドハルスト夫人、パロンデウームス(現殖民事務次官)エドワード親王、ケンブリッヅ公、メリリアデレード夫人(ケンブリッヅ公の姉)デッヅ侯、エギンバラ公、英國皇太子、ルイス内親王と云へる人々の名を列記したり

チブル城

淮亭居士はマンブリッヂウエルスあるチブル城に至り家扶マンカン氏の所藏する來遊人名簿帳を繰り返へして末尾に自名を署し了りたればマンカン氏は居士を案内して右手の庭木戸より進み入るに樹木鬱蒼として青草毛氈を敷き詰めたるが如く木の間に漏るゝ日光さへ青紛々たる林の中を三十間ばかり通り抜ければ豁然と開きたる庭前に出でたり庭の正面には鹿園を控へて其眺望の絶佳なる斯かる場所に柄に住みたらんには氣品も益々高尚にあり壽命も定めて延ぶるある可し奇景々々と默感して十分間ばかりは唯恍惚とみどれたりしがマンカン氏は居士を誘ふて硝子張りの花室中に入り得意の本草論を始めたり室内は花卉の種類に因り蒸氣にて温度を増減し熱帯の植物も甚だ多く中にも水百合とて葉は河骨の如く花も亦これに類するもの

殊に多きを見て仔細を問へばマンカン氏の言に當國にて名高き人にフエーポリットフラワとして花中殊に鍾愛するものあり例へばピーコンスフキールド伯のプリムローズに於けるが如き即ち其一例にしてチブル侯爵は殊に此水百合を愛で給ふに因り拙者の丹精にて斯く多種類を培養するものありと云ふにぞ居士は更に問題を轉トて扱て其チブル侯と申さるゝは御歳何程位ありやと問へばマンカン氏は此花室に對する遙か向ふの庭前に草刈器械にて芝生を并らし居たる一老人を指して彼の御方こそ大殿なれ御歳六十ばかりにして至て健康に渡らせらる好き機會なれば先づ御意を伺ふて事宜に依らば御紹介も致さんと夫より居士を花室に留めて自身は侯の側に進み何か數分間話し居りしが遽かに喜ばしき顔色を作して立戻りヘンリー氏より貴下を紹介されたる次第并に貴下が日本人ある由を申上げたるに侯は

淡泊ある御性質にて恰も午後の茶時あれば共に喫茶を興にせんとの仰あり是より館内の一覽を終て共々御茶の席に赴かんイザとて元と來し道を取り彼の立牛像ある正門の前に至れば氏はオホンの隠くしより鍵を引出して扉を開きツト入り込みたる兩側の壁には野蠻人の刀鎗弓箭等を掛け當國古代の甲冑を幾箇とあく兩行に列べたる玄關あり此玄關を通り過ぐれば即ち客室の入口とあり此所には一間半四方に餘まる大額に侯の寵愛する名馬の像を畫き置けり窓の四方に花鳥の透し彫りありて板の間は柏材を鷹の羽に敷き詰め蠟雜巾にて拭き上げたれば顔も暎らんとする計りに耀き風雅にして且つ古色を帯びたり夫より進んで客室に入れば室の四側に八間大の油畫と掲げ畫は英佛等の名工がチブル家代々の侯爵并に侯爵夫人及び其兄弟親戚の肖像を寫したるものにして中にも當家の寶物として今侯の祖母夫

人の襟に掛けたるは昔し王后アンの秘藏したりと稱する眞珠一聯の襟飾りにして王后斬首刑に處せらるゝ時取りて處刑人に渡したるものが次第に傳はりて侯の家に入り侯の祖母君が生前に好みて此襟飾りを掛けたるを以て扱てこそ油畫の中にてモ其姿を畫きたるものなりと云ふマンカン氏は窓掛に織出したる花紋より壁の彫刻物に就き意匠の行届きて面白き所を示し夫より進んで入り込みたるは食堂あり此食堂は客室よりも小あれども本館東の角に在りて右手の窓よりは鹿園を眺め左は廣々たる芝生にして毎日朝飯を喫する頃は旭日室内に差し入りて心氣清爽を覺ゆるを以て之を食堂と爲したるなりとぞ此時午後四時前後あれども貴族の家とては最早晚餐の支度に取掛りたりと見えテーブルの上に皿、ナイフ、フォーク、ナプキンを列べ又草花を挟みたる花瓶と左右二箇所に打ち列べ一席毎に薔薇花一輪宛を

置きたるは之を胸間に掛けて美香を嗅ぎながら食事するの趣向にや
わらん流石に高貴の家にては風雅にも又奥ゆかしき工風あるものか
あと居士は暫く感心したり夫より元の客室に引返へして其一隅より
左手の廊下に出て五六間も行過たる處に木口ありて是より庭前に立
ち出づれば此所には既に天幕を張りて幕下に大なるテーブルを置き
椅子を幾脚となく繞らしてテーブルの上に菓子、菓實、茶道具などを列
べあり侯は上席にて短き白鬚を捺りながら莞爾として此方を見やり
令嬢令息の外に親戚の貴族より來客たる者五六人ばかり兩側に列び
侯と正面に相對して今や給仕人の持ち來りたるミルク瓶を取りて之を
茶碗に注ぎ居るは即ち侯爵夫人なり居士は英國に來りて最早一年を
過ぐれども親しく侯爵の家に入りて家族と喫茶を與にするは今度が
初めての事にして何となく心應する氣味なきを得ず昔し日本にて徳

川慶喜公に謁見し大政奉還を説きたる者がワナ／＼と身震ひしたり
との談を聞きたれども心雄々しき者にては慣れざる席に出づる時は
心應して身震ひするは毎度有勝ちの事ある可し居士モナト當惑したれ
ども笑はゞ笑へ遣つて除けると先づ侯爵夫人の傍に到りて一禮すれ
ばダンカン氏は如才なく居士を引合せ夫より侯爵の側に連れ行き跡
は順々にアレはセナヤ姫なり其次はオースチン姫あり又其次がアベ
ルヤン家の公達ありあと次第に居士に指し示せば一々握手するに及
ばず唯向き合ふて黙禮を爲すのみ斯くて茶席の坐に着けば一坐の面
々是れまで親しく日本人に逢ふて詞を交へたることなく日本と云へ
ば蓬萊島の如き心地して人間の往來も容易ならずと思ひたるに其日
本國の人が今や目前に現はれ來りて喫茶を共にすることあれば何れ
も奇異の思を爲しアレよコレよと問題を出して居士の答を待つもの

如し殊に侯爵夫人は芝居を好ませらるゝよしにて日本の芝居は如何との問ひあり居士は直に之に答へて其は一言にして盡すこと能はざれ共飾りなく打出して申せば日本芝居の筋書と道具立てとの粗末あるは事實に相違なけれども役者の技藝に至りては日本は遙かに英國に優れり殊に踊りは東洋の美術彼のオペラ流の踊るに比して風致に霄壤の相違あり是れ我日本の踊りにては唱歌の意味と形體に顯はし例へば眺むればと云ふときは向ふを眺むる身振をあし耻かしのと云ふときに耻かきし様子を示すなど一種優美高尚にして西洋踊りの唯足のみを動かして風致に乏しき者の及ぶ所に非ずと思はる云々と述べたるに坐に在る若き婦人方は少しく不平の様子ありしが侯爵夫人は曾て或人の著述に係る東洋の踊と題する書を讀んで其優美風雅あるを賞したる一段を記憶したりとて頻りに之を見たと語りしと語られ

夫より種々の話に移りて扱て侯爵の云はるゝやう凡そ英國の習慣として遙々當城などに來る者は紀念の爲め他日一本の若木を贈りて之を庭内に植えしむるとあり是よりマンカンと御同行なされば此門前より門内に掛けて一帯に寄贈の植木あるを見る可し此木の中にて殊に珍らしきは某海軍少將より贈られたる奇木にして此奇木は千八百七十七年同少將が日本に到りたる時有名なる富士山に登り該山の樹木の一本取りても必ず山神の祟ありとて土人の取るを許さざるを少將は人の目を忍びて竊に携へ歸りたりとて其後當城に來りたる時紀念の爲めに余に贈れり近頃日本の花木中にて當國に來るもの者頗る多く牡丹、椿、菊、百合の如きは余の花室中にも數種を存せり斯くて一度來遊したる人が若木を贈るがまゝ、植付け置けば他日再遊の折なぞに其木が大に成長したるを見て主客共に昔遊を感ト何となく愉快に思は

る、ものなり當國の詩人中にも既に此意を詠せしものありて風雅にも亦奥ゆかしき事なりとありければ居士は言葉を續ぎ支那人の詩にも樓東一株桃、枝葉拂青煙、此樹我所種、別來向三年と云ひ又玄都觀裏桃、千樹總是劉郎去、後栽と云ふが如き東西の詩意人情自から相類するものなりなど物語りて打興せり、侯爵も閑暇の餘り外國人と共に語るは面白し、明後夜は我家族一同にて音樂會を催す筈なれば其席にも來會して英國の風俗を一覽せられよとの厚意に居士も恭しく之を謝し一同の人に挨拶してメンガン氏諸共侯の前を引下がれり

競馬

窓に當りて公園あり、天を凌がんとする柏の大木、枝葉蔚蒼として日光を遮り、散歩運動の路に沿ふて行儀正しく兩側に並び此間を通行すれば何とやら大洞の中に入りたる心地あり、朝早く起きて公園を散歩し

清新の空氣を腹一杯吸ひ歸り來りて茶を喫し、手輕き朝飯を了りて後、氣に入りたる小説本一二冊を携へ門を出掛けに籬に咲きたる一輪の薔薇花を折り、花盜人に罪はなしと手前勝手の理屈を付けて之を胸間に挿み、公園中にて通行少おく生茂りたる木の間に、より太陽の光線青味を帯びて霧の如く又虹の如く腰掛の上に落ち來る其腰掛に打寄りて讀み初めたるはビーコンスフー、ギルド伯の著述、コンニグスビー、中主人公たるコンニグスビーが彼のモンモウス城に於てシドニー、其他の人々と競馬の争を爲す處なり、今日は城外に競馬あり、田舎に行はるゝ小競馬あれば境遇も定めて同様あらん、左るにてモビーコンスフー、ギルドが小説中に記したる事實と今より目撃せんとする事實とを引合せたらば又一入の妙味あらんと扱こそコンニグスビー競馬の條と殊に撰んで研究するあれ斯くて今讀み掛けたるはモンモウス城の

競馬場にコニングスビーが乗り抜けて第一番に勝たんとする所と落馬してシドニーに打負けたる所なりしが日本の小説作者あどは其主人公を異常の者とし何事に附けても第一番に置くの癖あり例へば八犬傳中の主人公が徹頭徹尾人に負す如何なる危難に遭遇するも人間以外の働を現はすが故に讀者も遂に之れに慣れ主人公の災難は到底災難たる可らずとて悲喜の感情を減ずるの氣味あれどもビーコンスフキードが競馬の勝を主人公たるコニングスビーに歸せずして之を客分たるシドニーに譲りたるが如き即ち小説の事實を事實の事實と相近寄らしめたる者にして日本の小説家あども此邊には注意せざる可らずあど競馬の研究より次第に想像を他に馳せて獨り打領く其處に遙か向ふよりポク／＼と靴の音を先觸れとして來りたるは即ち居士の亭主役たるウチャートルヘンリー氏なり氏は競馬見物に赴くが爲め

にや一ツの縞の中に握り拳の三ツ四ツも入る可き程の派出なるピシチスコートを着し園遊會あどに用ゆるゴム靴を穿き細き笛付きの箆を携へ丈の高きブルドックを連れ莞爾としながら近寄りて「今日は競馬の日柄あり是よりチブル城外に御同行致さん御支度は」どの言に居士は答へて「何の支度あどが此儘で参りませう」と云へばヘンリー氏は驚きたる様子にて首を振ること二三度「當國には陶摸至て掛あけれども競馬の時にはライトフヰンガーとして指先の輕き怪物が現はれ競馬に乗り出す馬にても眼附きの頗る立派なる者は其眼を盗まれては大變と持主は心配する程ありソレ其時計あどは皆な宅にお置きなされ」と云ふ居士之を聞きて「日本にて生馬の眼を抜くと云ふことがあるが英國にては馬の眼を盗まれる心配が御坐りますか」と互に打笑ひながら家に歸りて頓て身繕ひしてヘンリー氏と共に競馬の場所へと押出し

たり

扱て當日の競馬場はチブル城の下手ある彼の鹿園の右側に在りて一望平面の原野なれども其中央に人家一二軒立ち並ぶが爲め競馬の之を一周する間に暫時眼を遮るものあり左れども競馬が人家に隠れて又再び顯はるゝ迄に前後様々の變化あるが故に全面一望眼に障はるもるさきよりも一層の興味と添へるものゝ如し斯くて此競馬場の處々に幅一間位の小堀あり堀に沿ふて高さ二三尺の生垣を結び競馬の乗手は生垣を越ね若くは小堀を飛び踰えて遅速を争ふことなれば馬は第一番に進み行くも馬の後足が堀に入りて人諸共に轉覆し第二番目に先を越さるゝものあり或は生垣を越ゆるの際に馬が足を引掛けて堀に振り落さるゝもあり之にが爲め往々怪我するものありと云へど見物人には興味あり抑も英國にて名高き競馬は之をダービー

と稱して其の規模大なること殆んど他に比類なく上等の馬が現はるゝと同時に競馬の賭博も頗る大に少しく山氣あるものは好んで往觀することかれども是れは本場競馬にして障得法を用ふることおし障得競馬は云はゝ花相撲の如きものにて面白く愛嬌あるを旨とすれば田舎にては大抵此競馬法を以て客引きの種と爲すものゝ如し當日出馬中の見事あるものは當城主チブル侯の持馬にして他の群馬の中に來れば雞中の鶴とも申す可く詩人の所謂此日牽來赤墀下、廻立閭闔生長風の趣あり此馬は濠州産にして其名をスウヰフト呼び當年九歳にして何れの競馬場にても他に負けたることなしと云ふチブル若侯は此馬に跨りて群衆に目禮しつゝ、競馬場を幾回となく乗り廻りければ衆皆お之れに着眼して當日第一の勝は此スウヰフトの物ある可しと評し合ひたり凡そ英國人は勝負事を好み例へばボート、クリケット若く

は彼の蹴鞠の如き見物人の數極めて多く殊に競馬は賭博の附屬物もあるが爲め其近郷近在より人の群集すること非常にして勝負檢分所の近傍は殆んど立錐の地なき程なり又馬見所は小家掛けに白き幔幕を張り木戸錢を取りて入場を許すの仕組にして田舎より出で來りたる者は大八車の如きものに辨當酒肴など載せて之と競馬の埒に沿ふて幾十疊となく打ち列べ車の上にて飲食かたゞ見物を爲すもの多く又高貴の人々は同トく其箱馬車を并べて中より見物する者あり競馬場には種々様々の金儲けを爲さんどて所謂野師の如き者所在より打集ひ飲食店を開くものあれば物見だかある客を相手に機關を引張るものもあり或は白人が黒ん坊に扮装して三味線の如きものを彈きながら卑猥の音曲を謠ふて群衆中に錢を乞ふも者もあり其雜沓云はん方なし此群衆中には眼を閃々と光らせて見ぬ振りをして人の顔を窺

ひ重もさうあ手を内々軽く働かせ時計を狙ひ紙入を掻き出さんど人の競馬を見る内に此方は見る人を見て奇術を實施する者もあり事に慣れたる人々は一見して其何物たるを知るものにや居士と同行したるヘンリー氏は雨外套を着し巻煙草を口に啣へて用も無きに所々方々をブラツキ歩く男を指して彼れこそ例のライト、フギンガーなりとて居士に注意したること數回に及べり醜業婦人も此中に交りて競馬の賭に思ひも寄らざる儲けを爲したる客を引張るの趣向あり一面の曠原只人の壁を築きて群衆幾萬人あるを知らざる其時午前十時となれば最早競馬の始りを告げ先づ第一の勝敗を較べて此第一に勝ちたる者のみを集めて第二の勝敗を試み第二に勝ちたる者のみを集めて即ち最後の勝敗を較べたりしが果せる哉チブル侯の所有馬スウキフトは第三即ち最終の競馬群中に入り此最後の勝を占むるは必定

ちらんと午後二時下り即ち競馬の終りを告げんとする其勢揃ひの時
 には満野群衆打亂れて彼よ此よと評し合ふ其喧しきと云はん方亦く
 ヘンリー氏は友人某と其勝敗に付き種々論談する所ありしが居士の
 意見は如何にやと問ふに居士は彼のスウキフトが是れまでの勝負に
 事もなげに多くの馬を乗り抜けたる手際を見て必定スウキフトの勝
 ならんと述べたるにヘンリー氏は首を捻り馬はスウキフトが第一た
 ると勿論あれども乗手は彼のチブル城を案内したるメンガン氏の子
 息にて馬上に體を反らすの風あり生垣を越ゆる時に常に後向きに投
 げらるゝと是れまで度々その例もありたれば今度の勝負にも怪我な
 ければ第一に居る可く唯その萬一の怪我を氣遣ふのみありと云ひ片
 唾を飲んで見物する中勢揃ひも濟みて最早馬は駈け出しスウキフト
 は出後れたるものにや三番目の所にて暫時の間駈け行きたれども彼

の人家に隠れたる頃は既に一匹を乗り抜けて第一番の馬に追ひ越さ
 んとするの勢にてありしが今度顯はれたる時は果してスウキフトが
 第一番とあり勢込んで三四間も駈け抜けたる有様なれば満場の群衆
 手を拍てドヨメキ渡り箱馬車の中に控へたるチブル侯の一家族は滿
 面笑を含んで見詰め居りしが最早勝敗も分らんとする少し手前に至
 り堀を飛び越へんとして乗手は果して後の方に投げられたり左れど
 も此時スウキフトは程遠く他と乗り抜け居たれば乗手は落ちながら
 も勇氣を鼓してヒラリと馬に打ち上り一鞭當てゝ飛出したる頃は第
 二番目の馬が既に七八間も先立ちて早くも勝負の場所に至り第一番
 どなりスウキフトは乗手の投げられたるが爲め第三番と爲りければ
 満場の人はずブル一家族の失望ヲ思ひ遣りて餘り拍手喝采も爲さ
 りしは其土地に在る貴族の如何に群衆に勢力あるやを見るに足る可

くヘンリー氏は氣の毒の中にも其先見の中りたるを鼻に掛けて頻りに友人に誇り居りしが競馬も最早終りたる頃雨少しく降り出して暮色蒼然チブル城は最早霧に隠れて見え分かつたざる迄にありし

貴族音樂會

西洋人は概して氣輕にして物に應せず身に覺はる藝能などは淡泊に之を人に示して自他共に相樂むの風あり例へば近隣相會して一夕の茶話を與にするの席にも西隣の娘がピアノを鳴らせば東家の息子が歌を謠ふて坐客の興を添ゆることあり或は手術或は滑稽種々様々の藝を以て無毒に一霄を永うするは上下貴賤何れの部分も別に換りたることなし又彼の俱樂部などにては素人音樂會を開きて堂々たる士君子が歌を謠ひ樂を奏し或は子供らしき舞踏を爲す等東洋流の嚴格に構へて常に坐上を睥睨し容子あり氣に立ち振舞ふを高尙ある人

物ありと爲す者とは大に其趣を異にするが如し殊に氣輕の一點は英國人の特性にして自然に一種の滑稽風を帶ぶるは他國人の及ばざる所あり例へば曲馬興行などの前坐に紅粉を塗り假面を被り奇狀異形を裝ふて滑稽を演ずる者あれども是れは大抵英國人にして其眞面目らしき中に言語態度の人をして抱腹絶倒せしむるものあるは其大得意とする所あり即ち英國の人々が日常交際の間にも氣輕く其隱微を顯はし相互に興を添ゆるの趣あるは其國風の一斑として見る可く且つ此風の貴族社會に入り貴族がイヤに服様振らず尋常平民と相接して聊か其趣を異にせざるは居士の最も感服する所にして殊に羨ましく思ひたるはタンブリッヅ、ウヰルズに於けるチブル家一族の音樂會是なり抑も此音樂會を開きたるは寺院寄附金を集むるの目的にして通常あれば有名ある音樂家を雇ひ多くの聴衆より入場料を得て其寄

附金と爲す筈あれども此音樂會には藝人を交へずチブル侯一家の令嬢令閨若くは其親族中の何侯何伯を云へる人が其隠藝を顯はして聴衆を集めんとする者にして此人々が音樂に通ト又唱歌に堪能なるは社會一般の風習として左まで怪むに足らざれども之を示すの氣輕きに至りては日本の如き國柄にて容易に見る可らざるものからん當夜はチブル城外に競馬ありし日の翌夕にして競馬見物の爲めにとて當地に來りたる人々も多く居士はネブル家の人々と既に一面の識さへあれば是非とも來會す可しとの案内を得たり即ち居士の主人役たるウチートル、ヘンリー夫人と共に同行參會を約したりしが音樂堂は近所に在りて僅か一丁足らずの距離あれども斯る集會の場所柄に外觀を飾るは一般の習ひ、一丁足らずの處へも所持の足を用ひずして馬の八足を煩はすは平常顔を賣りたる人の間接税とぞ知られたり斯く

て箱馬車に乗ると間もなく目と鼻の間ある音樂堂の入口に達し燕尾服を着けたる番人が雙方より出合ふて案内するに連れ夫人の手を小脇に抱い込みット音樂堂に入れば居士が外國人なるが爲めにや夫人が土地に名高きが爲めにやオルチエストラとて正面最近の位地に通され前後左右は貴婦人のみにして禮服の肩先より兩腕を出しハンケチーフを斑に玄たる自慢の香水を扇子で煽ぐは近所迷惑とも云ひ難し或る英國人の説に三十錢奮發して上等瀛車の美人と合乗し一瓶三圓で買つた香水十分の一の香を嗅けば其瀛車代は九儲けありと云ひたるは誠に然り扱て此衣香扇影の中に着坐して徐に其正面を見れば舞臺の兩側に花瓶を立て又棕櫚の如き青葉を點綴しピアノ、オルガンは片隅に列らびて知音の手を假らんとするもの、如く聴衆は息を殺して豫て渡されたるプログラムを幾回と亦く繰返し音樂家の舞臺に

出で来るを今や遅しと待受けたり斯くて午後八時頃ともなればチブル若侯は燕尾服ゆかた裕ゆかたに若あして徐々と前の方に進み當夜音樂會開場の趣意を述べ殊に演藝は素人のみあれば定めて聞苦きくしからんと陳謝ちんしゃすれば満場の喝采かくさい破るゝばかり次で出で来りたる音樂家はレデー、ヘンリーとしてチブル若侯の妹君あり年は二十三四にてもあらんか顔は石竹色いさぎを帯びて髪を高く結び上げ凜々しくして一癖ひとくせあり氣なるは貴族の令嬢たるに愧ぢざれども胸部より腕に掛けて肉少なく半身裸體はんしんらたいの禮服にて出でたる時は何とやら此世の人に非ざるが如く見ゆるは惜む可し抑も西洋禮服に雙腕ふたうでの肌はだを顯はすは未だしも宜ければ領りやうより脊せの一半を出すは如何にや元來人間の體内にて脊は美しき部分ぶぶんに非ず故らに之を顯はすは美術的の禮服とは思はれざれども人間全身を押し包みて常に之を顯はさざれば幾分か其形の發達を妨ぐることなきに

非ず今若し日本人の禮服が足を顯はすものなりしならば今日の如く足を曲げて其格恰かたがたを損そんすることおかりしからん西洋婦人の禮服は其半身を顯はすが爲め胸部に骨ほねの顯はれざるを貴び腕は何れも純白にして形の完全に發達したるを稱し婦人の美醜びしゆうを評するにも其顔付かほづらのみに由らず全身の形容けいけい如何を見て之を抑揚おさやうするものゝ如し例へばミセス、ラングトリー（女役者にして豊美の評高く曾て英國皇太子の寵を受けたる者あり）が其胸膈きやうかくより腕に掛けて肌膚雪きふゆきの如くにして筋骨きんこつの形跡けいせき顯はれず顔色も亦艶麗えんれいなりとて大に世評を得たるが如き其一斑を見る可きあり左れば彼の婦人の禮服が其肉形を顯はすを以て人爲淘汰たうたの作用を生ト隨て身體中或る部分の發達を促したるの實あること固より疑を容れずと雖も單に禮服として見る時は優美いびの趣を失ふて殺風景ころがけいに陥りたるの感かんあきを得ず閑話は暫く休憩して扱て此レ

デー、ヘンリーはヴァイオリンとて胡弓様の樂器を彈ずるの妙あり同行のウチートルヘンリー夫人は殊に之を好むを以て居士をして一層耳を傾けしめたり音聲は如何にも優美にして胡弓に比すれば更に變化の多きを覺ゆ餘音嫋々喝采の聲の中にレデー、ヘンリーは先づ第一席を終りたり次に現はれたるはチブル家の親族リンドハルスト侯の嫡子にして此頃よりチブル家に賓客たり歳は十八九ばかり貴族流の高尙ある中に穩和ある風采を帯び燕尾服にて徐に聴衆の前に立ち出で聲はそゞと一曲の歌を誦ひばチブル若侯の令夫人が歌に和してピヤノを彈じ聴衆感歎の餘り落針の聲もあき其中に曲を閑りて引退けば滿場の喝采破るゝばかり繰返しくして拍手數分間に亘りければリンドハルスト若侯は再び舞臺に現はれて更に一曲の歌を誦へり凡そ西洋の演劇場若くは音樂會に於て大に公衆を感せしむる時は聴衆

拍手喝采して再び其技藝を見んことを求め技藝家は其求めに應じて再び之を繰返し或は謝意を表するが爲め再び舞臺に進み來りて一禮を述ぶるを例とするが如し當夜の技藝家は貴族中鏘々の人あれども社會一般の禮とあれば其貴族あるを以て之を辭せず聴衆より喝采を得るときは技藝上の知己として慇懃に禮を述ぶるなど亦是れ當夜の一興と思はれたり是よりチブル一家并に親族中の令嬢夫人等更るがはるに技藝を演じて當夜の慈善音樂會を了りたりしが居士は此音樂會の尋常藝人の手に成らず貴族諸氏が自藝を售て集めたる金を慈善の用に供するの優美にも又頼母敷きを感じ當夜の事と追想すれば今尙は彼の貴族諸氏の優美穩和ある風采を恍として眼中に再現するあり

英國にては貧富の度殊に甚しく同國最富の貴族と稱するウェストミンスター公は一日の収入千五百磅即ち凡そ一萬圓あり之を一年に積れば三百六十餘萬圓の収入あるものにして英國の利子歩合は極めて低く貴族の所有する財産に四朱以上の利を得るものは極めて稀なるべきが故に其財産は凡そ一億圓に相當するものならん斯かる富豪ある其一方を見れば貧乏も其極點に達して一日に一切れの麵麩を得るとさへ叶はざる者少なからず試に或る都府の貧乏街に入れば貧者の有様目も當てられず殊に英國リヴァプール府の如き船渠勞役人の多き土地柄あれば英國中貧弱者の數多きこと他に其比例を見ずと云ふ今この貧乏人の有様を見るに家は貸長家五六層の上に在りて其不潔なるは今更申す迄もなく居士の如きも如何に奇と好めばとて此住居に近付て之を一覽するの勇氣亦く自から之を目撃することを得ざりし

かども此貧乏人が市街に出でたる時の模様を見るに衣物は油雜巾の如く垢染みて其縞柄さへも區別すること能はず襟元の垢は石炭の烟と苦役の汗との調合物にして其黒きこと言語に絶し嚼み煙草杯をクチャクと嚼みて爪先きの扱けたる古靴を穿き破れ帽子を後ろの方に被りて其半額を前に露はし往來に唾を吐きながら通行する有様は日本の貧乏人かども違ひ通り違ふても臭氣を生じて數間先きより之を避けざるを得ず又貧乏街の近傍に到れば徒跣の小兒等が僅に體を被ふばかりの衣物を着て帽子も被らず散らし髪にて人の跡を付き纏ひマスタークと呼びながらベチーの顔を見んとして幾人どあく付き纏ふは哀はれにも又穢らはしきとあり左れば斯かる貧乏人の中には兩親を失ひたる子供若くは庶子かどもにして僅に歩行し得る頃より最早頼る可き方もなく必死の場合に迫る者なきに非ず斯る貧乏人の

存様と彼の富豪家とを比較すれば人間は何故に斯くも生涯と異にするや天に厚薄なく親疎なければ斯る貧富の懸隔は決して天の意に非ず生れあがらにして錦繡の幕に坐し生れあがらにして襤褸の中に包まるゝは何故あるや貧乏の爲めに不平を生じ氣象の荒々しく爲りたる人間に取りては之を思ふて殆んど堪ふ可らざる程の事あらん英國なせにては教育も所謂強迫に非ずして自由の主義を採るが故に貧乏人にして學問する者至て少なく之れが爲め其不平を議論に示して喋々囁々する者少なければも獨逸の如く教育に強迫主義を執り貧人に高き教育を授くれば所謂社會黨論の勢力を助くると是れ亦自然の數なりと云ふ可しオーヴァエジュケーションとて教育の分外に進みたるは往々社會に弊害を生ず可しとは毎度耳にする所あれども如何さま英國の如き國柄にて高き教育を貧乏人に授け形體の事は進まずして精神

のみ獨り高尚と爲れば彼の社會黨論も益々其力を得て社會の平和を保つこと或は六箇敷しかる可きなり然るに英國の教育法は至て自由雜駁にして貧乏人は概ね無教育なるが故に富豪者は平常の罪滅しとして或は貧兒救濟院或は鰥寡養老所等を設け慈善仕組は至て多く無数の貧乏人をして時々慈惠の雨露に霑ひ其不平憤懣を忘れしむるの機轉は頗る巧妙なるが如し貧者の小兒五六歳にして所謂襤褸學校に入り無錢にて一通りの教育を受ければ卒業の後或は商店の賣子と爲り或は製造所の職工と爲り其他種々様々の職業に就くことにして是れ亦一種の方法あれども十歳以上の男兒をばポリース、ホームと云へるに入るものあり此ポリース、ホームは無宿の兒童を保護監督する場所にして其の中に宿する者には何なり相當の業を爲さしめ其働きて得たる金を以て何程にても旅宿料を拂はしむるの仕組にして是れは懶